



連続フォーラム

「チョゴリときもの」 No. 24

今を生きる在日コリアン
オールドカマーとニューカマー

はじめに 在日コリアンの「代表≡表現」性」

小倉 紀蔵 京都大学大学院 人間・環境学研究所 教授

「代表」という言葉と「表象」あるいは「表現」という言葉は、似たような意味内容をもっています。英語で「representation」といえば、「代表」という意味もありますし、「表象」「表現」という意味ももちます。「representation」は「presentation（提示すること）」に「re（再び）」がついているので、「再び提示すること」がその原義です。わかりやすくいうなら、「もとのものにいちどなにかの作業を加えて、もとのものの似姿として姿をあらわすこと」です。

国会議員は日本人全体そのものではありませんが、「日本人ひとりひとりの全員に、国会議員選挙というフィルターを加えて、日本人ひとりひとりの全員の似姿として姿をあらわした人たち」です。つまり彼ら彼女らは、「日本人の代表」であるとともに、「日本人の表象・表現」でもあります。国会でグーグー居眠りをしている国会議員が何人もいれば、それは「日本人が会議中にグーグー居眠りをする姿」を代表・表現しているわけです。しかし日本人がいくら居眠り好きだといっても、国会議員のよう

に臆面もなく会議中にグーグー眠る会社員や公務員はそうそういないと思います。だからこの意味で「国会議員が日本人を代表している」と言うのはおかしいことですし、事実としてまちがっています。

しかし、「代表」とか「表象・表現」という概念にはこういうおかしいこと、まちがったことがどうしてもつきまといまいます。「代表」や「表象・表現」というのが、「もとのものそのもの」ではなく、その「似姿」をあらわすものであるかぎり、その両者に「ずれ」があるのは当然でしょう。

しかし、この「ずれ」を政治的に利用することもできます。この「ずれ」を自分たちの都合のよいように操作し、つくりあげることによって、なんらかの利益を得る、ということが人間社会では頻繁に行われます。これを〈代表Ⅱ表現の政治〉と呼んでもいいでしょう。

たとえば韓国で日本軍慰安婦問題をイシュー化した人びとが、「慰安婦」を「表現」する「代表」として「いたいけな少女」の像を選んだとき、そこには「慰安婦として苦しい経験をしたすべての女性たち」とこの「少女像」とのあいだには当然「ずれ」が生じています。しかし、少女の像を提示した瞬間、それを見た人びとにはなんらかの「了解」が生じるわけです。その「了解」を土台にして、慰安婦問題を自分たちに有利な方向に進めていこうという政治的な意図が、そこにはあります。

日本の広島で、原爆をめぐるさまざまな記念碑などのモニュメントが、「平和」という観念で「表現」され「代表」されているのも、「日本の加害性」を含めた戦争全体の姿とは大きな「ずれ」があります。

その「ずれ」に気づくまい、気づくまい、としてきたのが「戦後日本」の一側面だったのでしょう。

在日コリアンに関しても、この〈代表＝表現の政治〉は戦後ずっと、きわめて強く機能してきました。「貧しくてボロをまとった在日コリアン」「暴力的でチンピラのような在日コリアン」「つねに反日的で日本社会を糾弾している在日コリアン」……これらはあくまで「表現されたもの」であって、在日コリアンひとりひとりの実像とは大きな「ずれ」があるにもかかわらず、戦後日本社会ではくり返しくり返し「在日コリアンの像」として「代表」されてきたものです。ある在日の女性作家が小説の原稿を書いたら、日本人の編集者が、「これでは苦悩が足りない。もっとあなたが苦しむ姿をとことん書かなければ、あなたは在日コリアン作家にはなれない」と助言（強要？）した、という話などをわたしたちは聞いてきました。

わたし自身の身近には在日コリアンが多く、在日コリアンとのつきあいも広いので、「在日コリアンとは実に多様であるなあ」というのが率直な実感です。特定の「在日コリアン像」が全体を「代表」して「表象」されてしまうことは、実は多様な在日コリアンひとりひとりにとっては暴力なのです。

今回、「チョゴリときもの」にご登場いただいたのは、朴一氏と洪淳道氏です。

朴一氏は、わたしの知るかぎり、「在日コリアンの代表性」とことんまで広げることにもっとも努力してこれ、またそれに成功された方です。在日コリアンには政治的にいって朝鮮総連もあれば民

団もあるしノンポリもいる。知的パワーエリートもいれば芸能人や水商売の人もある。大金持ちもいれば貧乏人もいる。オールドカマーもいればニューカマーもいる。コワモテもいれば文弱もいる。反日もいれば親日もいる。どんぶり勘定の人もいれば細かい人もいる。それら多様な在日コリアンの総体を、できるだけ偏らずに全面的に日本社会に提示しようと努力してきたのが、朴一教授なのです。これは、きわめてむずかしいことです。なぜなら、実是在日コリアン社会自身が、日本人社会に対する〈代表Ⅱ表現の政治〉の手練れの主体だからです。在日コリアンは、自分たちを日本社会の重要な主体として登録するために、〈代表Ⅱ表現の政治〉を实にうまくやってきました。たとえば「在日コリアンはみな、強制連行された被害者の子孫である」などという「表現」は、いまではその真実性が否定されていますが（在日コリアンの一部は戦時動員された人の子孫ですが、全員ではありません）、かつてはこの「表現」が絶対的な真実であるかのように信じられていました。そのような荒々しい「政治学」のさなかで、「在日コリアンの全体像」をできるだけ広い幅で提示しようという朴一教授の努力は、稀有なものだと言つてよいのです。

また洪淳道氏のお話は、これまであまり語られてこなかった、「ひとりの誠実な在日コリアンが、信仰や事業という人生の重大事にどのように取り組んできたのか」ということを本人が静かに語る、という大変よい場となったと思います。もちろん在日コリアンのひとりとして、洪淳道氏は差別や苦労や

苦悩を数多く経験されてきたのですが、洪淳道氏は、そのいずれにも特別な焦点を合わせずに、つまり特定の経験に過剰な「代表性」を付与せずに、淡々と語ってくださったと思います。このような語りが重要な理由は、まさにこのような淡々とした語りの「代表性」表現性こそが、人が人生を生きたという行為そのものであると思うからです。人はだれしも、自分が経験したことのどれかに過剰な焦点を当てて生きることとはつらいことだと知っています（たといその焦点が当てられた経験が「すばらしい」経験だとしても、過剰な代表性がそこに付与されてしまうこと自体が「つらい」ことなのです）。それなのに人は、なんらかの必要のためや、ほかのだからから強いられて、人生のある経験に過剰な代表性を与えてしまいます。在日コリアンの生というのは、ある意味で、このような〈代表＝表現の政治〉が生の時空間のすみずみにまで食い込んでしまっている営みなのではないかとわたしは思っています。一日の24時間のうちに「日本ってイヤな社会だな」と2時間くらい思ったとしても、あたかも頭の先からつま先まで「反日的」と自己規定しなくては組織などで生きづらくなる、とか、「実はオモロイことやくだらないことが結構好きだけど、いつも苦虫を噛み潰したような〈苦悩する人間〉の姿を演じなくては在日知識人として失格だ」という自己規定をしてしまう、などということが、在日コリアンには過剰に負荷されているのではないのでしょうか。それは在日コリアン自身を生きにくくする要因のうち大きなものでしょう。

洪淳道氏のお話には、そのような「過剰な代表性の政治学」を打破する静かな姿勢が見られたのです。なお、今回の「チョゴリときもの」では、はじめての試みとして、参加者みなさんの討論の時間を設けました。時間も少なく、わたしの進行もつたなかったため、十分な成果をあげたとはいえませんが、在日コリアンの問題を少しでも「自分たちの問題でもある」と当事者的に考えることができる時間にはなったのではないか、と思っています。

目次

連続フォーラム

「チヨゴリときもの」No. 24

今を生きる在日コリアン オールドカマーとニューカマー

第1回

在日韓国人のオールドカマーとニューカマー
そのホンネとタテマエに迫る

第1部 講演会 9

第2部 対談 43

第2回

ワークショップ「共に生きる、ということ」

第1部 講演会 61

第2部 ワークショップ 89

連続フォーラム「チョゴリときもの」No.24

今を生きる在日コリアン
オールドカマーとニューカマー 第1回

在日韓国人のオールドカマーとニューカマー——そのホンネとタテマエに迫る

第1部 講演会

日時

● 2017年3月4日(土)

場所

● k o k o k a 京都市国際交流会館

進行

● 小倉紀蔵氏 京都大学大学院人間・環境学専攻教授

講師

● 朴一(パク・イル)氏 大阪市立大学経済学部教授

※所属や役職等は、フォーラム開催時のものです。

司会 ● 定刻になりましたので、連続フォーラム「チョゴリときもの」第24回目を始めさせていただきます。よろしく願います。

このフォーラムは在日コリアンという存在に焦点を当て、それまでご自身の思いや意見を語る機会の少なかった在日一世、二世の方から直接お話をうかがう取り組みから始まりました。2013年、第21回を機に「シリーズⅡ」として再スタートしまして、多様な在日コリアンの「いま」をどう考えるかに視点を移してまいりました。

今回のテーマは「今を生きる在日コリアン——オールドカマーとニューカマー」です。本日の講師は大阪市立大学教授の朴一先生^{パクイル}、進行役は京都大学教授の小倉紀蔵先生です。

第1部は朴先生の講演会「在日韓人のオールドカマーとニューカマー——そのホンネとタテマエに迫る」というテーマでお話いただきます。そのあと第2部として小倉先生との対談、さらに15分の休憩をはさみまして、第3部につづきます。第3部は、みなさんからいただいたご質問やご意見をもとに進めさせていただきます。小倉先生、よろしく願います。

小倉 ● こんにちは。小倉紀蔵と申します。「チョゴリときもの」は、今回で24回目です。「チョゴリ」は韓国、朝鮮の民族衣装、「きもの」は日本のものです。在日コリアンと日本人が互いに学んで、いつしよに暮らすための智慧を探す。その取り組みを「チョゴリときもの」という象徴的なことばで表し、二十数年間つづけてきました。日本、とくに京都に暮らしていらっしゃる在日コリアンの人たちとどのように共生してゆくのか。

共生するには、その人たちの文化や世界観、生き方、ことばがどういふものなのかをまず学ばないといけません。「共生」なんて、たんなるお題目みたいに唱えていてはだめです。

この数年間は、それまで取り組んできたものとは趣向を変えました。それまでは基本的に在日の方がたがどういふ思いで、どういふ人生を歩まれてきたのか、とにかくお話を「聴く」ことを中心にしてきましたが、第二ステージはお話を聴くだけでなく、議論してきました。「私たち」ということばを使ってよいかわかりませんが、いわゆる「在日コリアン」ということばで、往々にして私たちが思い浮かべるイメージとは少しちがう人たちの声を聴いてみたいという思いがあります。

たとえば、昨年（2016年）は鄭大均^{テイタイキン}さんをお招きしてお話を聴き、議論しました。鄭さんのお名前をご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、『在日韓国人の終焉』という本を書かれた方です。このタイトルだけを聞いたなら、在日韓国人なんかいなくなってしまうというような、乱暴な印象を受けます。在特会（在日特権を許さない市民の会）のような極右の主張と似ているように思っています。しかし、まったくそうではありません。在日韓国人たちは、日本社会で差別されながらも一所懸命に生きてこられました。なかには100年以上前から住む人たちもあり、彼らはオールドカマーとよばれています。いっぽうで、朴先生の資料を見ると、だいたい1990年代以降に日本にいらした方をニューカマーと定義しているようです。1989年に韓国で海外旅行が自由化されて以降、日本にいらつしやった方たちのことです。

いっそ、日本人になったらよいのではないか

オールドカマーについての、鄭大均さんの議論は以下のようなことでした。在日韓国人のなかには、韓国に対して特別な帰属感がなく、韓国語ができない人もたくさんいる。韓国の文化を身につけていない人もたくさんいる状況で、いつまでマイノリティとして生きてゆくのか。日本国籍を取得して、ルーツを消せということではありません。朴^{パク}や吉^キや丁^{チョン}といった姓をはじめ、自分たちのルーツや文化、ことばを大事にしながら、日本国籍をとって日本社会のフルメンバーとして参加する。もちろん、日本国籍をとれば国政参政権などをもつことができますから、そのように生きるほうがよいのではないかという議論でした。

これは私にとって重要な議論でした。「スタンダードな在日」がいるとは思いますが、マスコミにはよく「在日コリアンの声」として、往々にして極端なタイプの声が出てきます。だいたいマスコミに出てくる在日の声は、民族性が強調されています。在日は日本社会あるいは日本人とはまったく違う人たちで、自分たちの権利を守るぞという主張です。

しかし、これはごく一部の声です。日本社会のマイノリティとして権利をフルにもつのはもちろん望ましいことですが、法的な壁があって参政権が制限されます。ならば日本国籍をとったほうがよいのではないかと鄭さんは言いますが、こういう考えは多くの在日の方をもっていらっしゃるのですが、なかなか表に出てきません。こういう鄭さんの考えも、前回の「チョゴリときもの」でとりあげ、十分に語っていただきました。その記録がホームページにありますので、議論をお読みにになりたい方はぜひご覧になってください。

さあ、私の問題提起は終わりにして、朴先生、どうぞよろしくお願いいたします。

日本人にも同胞にも葛藤を覚える

朴 ● きょうのテーマは「在日韓国人のオールドカマーとニューカマー——そのホンネとタテマエに迫る」です。この「チョゴリときもの」には何回か登場させていただいた経験がございます。在日コリアンの問題は、たんに在日韓国・朝鮮籍の人だけの問題ではなくて、日本にいる200万の在日外国人と日本人との共生の問題だと考えています。このような問題を地道に追いつづけた「チョゴリときもの」という試みには、頭がさがる思いです。しかも、地味な試みにもかかわらず、これだけ集客力があるのはすごいことで、熱心な受講者のみなさんがこの会を支えてくれたものと思います。



朴一氏

まず、私も問題提起をします。私はかねてからニューカマーの問題に関心がありました。文部科学省から科研費（科学研究費補助金）をいただいて、3年間ほどニューカマーとオールドカマーの比較研究をしました。オールドカマーについては大阪・鶴橋の商店街地域を、ニューカマーについては東京・新大久保のコリアンマーケットを中心に、10人くらいの研究者で比較研究をしたのです。

きょうは、私の3年間の研究報告を中心にお話しします。また、私がそこで出会ったニューカマーたちと、私のようなオールドカマーとの違いをお話しさせていただきたいと思います。

私は、朝鮮が日本の植民地だった時代に祖父母が日本に住みついたという歴史的な経緯のあるオールドカマーです。ニューカマーに対しては、ある種の先入観や嫉妬など、いろいろと複雑な感情があります。ですので、オールドカマーがニューカマーのことを客観的にしゃべるのはむずかしい。むしろ小倉先生のようにソフトで、あまり感情を表に出さない研究者のほうが、こういう研究をするには適切ではないかと思っています。

しかし、きょうは個人的な感情はできるだけ抜きにします。オールドカマーとニューカマーは、互いに対して、どういうホンネとタテマエがあるのかをお話しさせていただければありがたいと思います。

どこに行っても外国人扱いされる

一口にニューカマーと言っても、ニューカマーにはいろいろな国籍の方がいらっしやいます。私が「在日韓国・朝鮮人」とよぶ人びとだけではありません。なかでも急速に増えたのは、1982年に入管法（出入国管理及び難民認定法）が改正されて以来、単純労働が認められた日系ブラジル人です。日系ブラジル人の社会も、私が研究関心を抱いている対象です。

それから、兵庫県を中心に多住しているベトナム人です。ベトナムからは日本の大学への留学生が増加しておりまして、私の大学にも100名くらいのベトナム人がいます。いままで日本への留学生の大半は中国人の方でした。感覚的に言うと、おそらく10年後は中国人よりもベトナム人のほうが多くなるのではないかと思います。ベトナム人が増えています。

南米からきた日系人は、もともと明治以降にブラジルやペルーに出稼ぎに行った人にルーツがあります。いまの日系人は現地で生まれた二世、三世の人たちです。日系ブラジル人を研究していたときに私が思ったのは、すごく在日コリアンのオールドカマーと似ているということでした。なぜかというところ、彼らは日本にきて決して日本人として認めてもらえないからです。ブラジル人社会で成功している人もいるのですが、複雑な思いで生きている人たちもいます。ある意味で在日コリアンと日系人たちは、似ている部分が少なくないという感じがします。

名前を捨てる悲しさ

いろいろなところでベトナム人の子どもたちを参与観察していたら、おどろくべきことに、ベトナム人の子どもの多くは、日本の学校に日本の名前で通っていることがわかりました。明らかに日本人の顔をしていないのに、通名とよばれる日本名を名乗っている。

ベトナム人の顔をした子どもたちが、「田中」や「山田」といった名札をつけているのです。「なぜそのような名前なのか。君はベトナム人じゃないのか」と聞くと、日本の名前で学校に行かないと差別されると言います。滞在歴20年前後のベトナム人が子どもを産んでいるのですが、彼らの子どもがどのような経緯で通名を名乗っているのかを調べてみました。学校側は「本名を名乗ってください」と言うのですが、両親がそうさせません。とくにお母さんがそうです。

30年ちかく前、インドシナ難民とよばれたベトナム人が日本でいちばん苦労したのは、アルバイトを見つけることだったそうです。たとえば、アルバイト先で「グエン」という名前ではぜったいに雇ってくれない。「山田」や「田中」などなんでもよいから、わかりやすい名前にしようと思いました。彼らは、ベトナム名を名乗って日本で生きることがどれだけむずかしいかを痛感させられたのです。

だから、自分の子どもには、なんとか差別されないように日本の名前をつけようと思います。学校の先生の間にはまっとうな人もいて、たとえば本名の「グエン」で子どもを通わせてみませんか、子どもや親を説得しています。しかし、お母さんは「先生はベトナム人として日本で働いた経験がないでしょう」とかたくなに言います。先生がベトナム人たちと涙ぐましい格闘をしている姿を見ると、私たちの世代の在日韓国人は思い出がよみがえります。

通名を名乗ることは、私たちの世代にはよくありました。かつて講演会で何回か自分の幼少期の体験を語ったのですが、私は小学校から高校の途中まで「新井^{あらい}」という通名でした。本名は「朴^{イル}二」ですが、「一^{イル}はじめ」と読ませ、新井^{あらいはじめ}一という名前で学校に通っていました。友だちからは「洗い、始め!」とからかわれ

たり……。

こうして、名前でおちくられた経験があります。私自身、新井一という通名ですごした青春時代の苦にがしい思い出が、いまでもあります。この話をするのはなかなかつらいことで、本名宣言をするまでには葛藤のプロセスがありました。人権運動をしていた日本人の先生との出会いによって、やっと高校3年生のときに本名を取り戻したのです。

経済成長の明るさを背負うニューカマーたち

名前との格闘の歴史がある私は、いまのベトナム人の子どもたちを見ると胸を突かれます。日本は多文化共生社会に移行したといいながら、まだまだ日本的レイシズムが残存している部分があります。しかし、私がいままで出会った韓国系のニューカマーには、オールドカマーの一世や二世が抱いていた日本に対するドロドロした意識がないのです。むしろ、日本社会に希望を求めてきた人がすごく多いです。

私はかつて、10人くらいの研究者といっしょに彼らを調査したことがあります。対象のなかには台湾人とのダブルもいますから、私の研究のすべてが絶対的なものではないという前提ですが……。サンプルは100人くらいでした。

新宿から新大久保にかけての地域には、もともとオールドカマーの一世たちがかなり住んでいました。植

民地時代に、出稼ぎ労働者として日本に渡ってきて住みついた人たちです。たとえば、いまお家騒動を起こしているロッテをつくった^{シキョクホ}辛格浩（重光武雄）さんも、もとは新宿と大久保のあいだに小さな石けん工場をつくって、そこからスタートしたといわれています。こういう歴史のある人たちが、この地域に40軒ほど住んでいます。

いっぽう、ニューカマーが渡ってきたのは1980年代に入ってからです。韓国が海外渡航を自由化し、まずはたくさんの人びとが観光として日本にやってきました。観光しながら不法就労する人も大量にいました。日本が韓国人を引き寄せたのは、バブルが起こって、単純労働の分野で労働力が不足したからです。これに引っぱられて、日本に職を求めてやってきた人たちがたくさんいたのです。

ニューカマーは、自分たちを肯定できている

私は新宿の歌舞伎町を調査しましたが、じつはこのあたりにはその調査より少しさかのぼってコリアン・クラブがたくさんできていたのです。ある時期、ある財団の研究費をもらうために「歌舞伎町の韓国人ホステスの研究」というテーマで応募したら、当たりました。

コリアン・クラブは、料金が高いです。小倉先生はあまり行かれないと思いますが、私は研究で初めて行きました。どこまで脱線して話ができるのかということもあるのですが、韓国人クラブの特徴を理解する

ためには、日本のクラブにも行かなければなりません。日本のクラブと韓国人クラブの違いがわからないです。私はべつに女性に興味があるのではなくて、あくまで研究のために日本のクラブにも行きました。これは身銭を切って行きました。(笑)

日本のクラブでは、客がホステスを気に入ったら、その人を指名します。たとえば、「みゆきちゃん」としましょうか。みゆきちゃんに「気に入ったから次から指名するよ」と言ったら、みゆきちゃんからメールが入りました。次は、みゆきちゃんと店外デートをして、そのまま店に行きます。

ところが、みゆきちゃんは「先生、申しわけないけど失礼するわね」と言って、ウイスキーの上にハンカチを置いたまま、戻ってこないのです。なぜかという、またべつの指名客がいるからです。指名客のところをずっとまわってくるから、一時間たってもぜんぜん戻ってきません。どうでもいいようなホステスさんが横について、グダグダ相手をして、みゆきちゃんが戻ってきたときには、もうタイムリミットです。「タイムリミットですよ。先生、延長されますか」と言われて。日本のクラブはとんでもないボッタクリ・ビジネスだと思えます。(笑)

コリアン・クラブのすごいところは、ママさんは「この男だったら、指名するのはだいたいこの女の子だ」と直感でわかるということです。たとえば、小倉先生が行ったら、だいたいぼっちゃりした髪の毛の長い女性が横につくでしょう。勉強ばかりしている人をおとすような女性というのはだいたいわかるわけです。(笑)

コリアン・クラブの場合は、ママさんが「この子の面倒をみてね」と言って、その子が横についたら、その客からしか指名を受けません。韓国ではお客と女の子の絶対的關係がつくられます。一時的なパートナーとし



てほかの人が横についたりしますが、その指名を受けるのはただ一人の男性からだけです。ですから、「○○ちゃんがこの歌舞伎町で生きられるかどうかは先生が決めるのだから、面倒をみてあげてね」と言われたら、ものすごく責任感が生まれます。疑似結婚のようなかたちで、その女性との関係を迫られる。これは韓国的なひとつの社会システムです。

その女の子が月に20万、30万円のお金を稼ぐためには、週3回くらいクラブに通ってあげなければならない。女の子はお客のことをどうよぶかという、日本のクラブだったら名前で「○○さん」などによぶのですが、彼女は、お客のことを「オッパ」とよぶのです。つまり「お兄さん」です。「オッパ、きょうはきてくれるの」と。そういう関係性で、恋人関係から疑似兄妹関係に転換してゆきます。

仲よくなったら彼女のマンションによんでくれます。とうぜん、お客もそれを期待している。そのようになるためには、クラブに何か月間も通わなければいけない。そのためにどれだけのお金を投入したかわかりません。

そして、女の子の家に行ったら期待するじゃないですか。女の子を自分のものにしたとか、お客には欲望があります。そういう関係が始まるかなと思って、お客はモーションを起こす。すると女の子は、「オッパはオッパでしょ」と言う。「オッパは妹に手を出す？」と。そこでガンと壁ができるわけです。このやり方がものすごくまいいのです。兄妹でそんなことになったらいへんな問題になりますから。

1980年代から90年代にかけてたくさんさんのコリアン・クラブができたのは、ある意味でそこにマーケットができていたからです。とうぜん、そこにはコリアン・クラブのコミュニティができました。コリアン・クラブの人たちは莫大なお金を稼ぎます。

たとえば、歌舞伎町にはクラブの人たちが行く美容室があります。おもしろいことに、韓国美容室と日本の美容室は少しちがうのです。韓国の美容室は髪の毛のセットだけでなく、メイクも韓国化粧をしてくれます。

いまでこそ韓国の化粧品が日本を席卷して、日本の女性にも支持されていますが、私が調査をした頃はちがいました。たとえば、韓国人女性はナチュラルメイクをしながらも、自分の特徴的な部分を浮き立たせる個性的なメイクアップをします。自分のアドバンテージを浮き立たせる化粧です。韓国人女性から見たら、日本人女性は化粧に失敗しているように見えるそうです。日本の化粧は顔がベチャツとして見えるが、韓国の化粧は自分の特徴をバシッと出す。

私が観察して思ったのは、韓国人女性と日本人女性は目がちがうということです。韓国の女性は目で男を殺します。韓国語で「目」に「刀」と書くのですが、目の刀で男性はスパンと斬られるのです。それで、客

はどんどんその女性のとりこになってゆきます。

韓国人女性は、韓国の食堂にしか行きません。メニューは基本的な韓国食堂シッケンの伝統料理です。テンジンチゲなどを韓国の一般的な味で食べさせてくれる食堂が、ホステスさんたちのために営業しています。それから、韓国ドラマをあつかっているビデオ店など、ものすごい数の関連産業が歌舞伎町から新大久保にかけて形成されました。

その後の大きな波は、1997年のアジア通貨危機のときでした。韓国でも通貨危機が起こって、職を失った人たちが人を頼って新大久保から歌舞伎町あたりに労働者としてどんどんやってきました。このときは、とくに建設労働者が多かったと聞きます。

心の支えとなる教会の存在

韓国人社会で一つの出会いの場になっていたのは、まちがいなく教会だったと思います。教会は、韓国人のコミュニティを理解するためのいちばん重要なキーワードです。ここでいろいろな職種の韓国人が出て情報交換します。たんなる宗教儀礼の場ではなく、日本社会で生きてゆくための智慧を互いに授け合う場になっていました。私も、ずいぶん教会には行きました。

ときどきオールドカマーもそこに来ます。韓国人教会は京都にもいくつかあって、私が知っている人も

何人か、在日大韓基督教会で教話をしました。最近の在日大韓基督教会の大きな特徴は、圧倒的にニューカマーが影響力をもっているということです。韓国人は、日本にきても友人が少なく、つてもない。なにもない人でも、教会に行ったらいろいろな出会いがあります。そこで自分のパートナーを見つける人もたくさんいます。私の大学の先輩には、先妻が亡くなったあと、素敵な女性を見つけて、結婚して、しあわせな生活を送っている人がいます。そういう人たちがたくさんいます。

さらに「冬のソナタ」が放送された頃から、とくに新しいビジネスとして、韓流ブームを中心としたビジネス・シヨップが新大久保に数百軒も成立しました。私は成功している何軒かの社長にインタビューしたことがあります。成功している人がけっこうたくさんいました。最初は留学をきっかけに日本の大学に入學したけれど、韓国には戻らなかつたのです。食堂を経営する、レストランを経営する、ビデオ・シヨップを経営する、韓流グッズの店を開く、美容院を経営する、教会関係の仕事をするなど、いろいろな人がいます。

祖国の冷たさがいやになる

ニューカマーがつくった韓人会（在日本韓国人連合会）という組織があります。韓人会は、日本在日社会のなかで大きな影響力があります。というのも、韓人会は祖国とのあいだに太いパイプがあるからです。最近の傾向として、なぜ韓人会が日本で影響力をつけてきたのかというと、韓国で「在外公民に選挙権を与

える」と認められたからです。とうぜん、私たちオールドカマーにも選挙権が与えられます。

おそらくこのまま朴槿恵^{パク・クネ}大統領が弾劾されれば（2017年3月4日現在）、順調にゆくと来週か再来週あたりに憲法裁判所で判決がくだります。もし罷免となると、60日以内に大統領選挙がありますから、4月から5月に新しい大統領が誕生します。すると、この日本でも投票が行なわれます。在日韓国人が、東京の韓国大使館や駐大阪の総領事館で投票します。

選挙のとき、ニューカマーとオールドカマーでは盛りあがり方がぜんぜんちがいます。私のようなオールドカマーにとって、じつさいに欲しい選挙権はなにか。韓国の大統領や地方自治体の選挙権ではなく、むしろ自分が生活している地域の政治を変える日本の地方参政権です。これこそが身近な問題です。在日韓国人にとって、知っている政治家が何人いるのかというと、たとえば自分の住んでいる地域で小学校や中学校の同級生や知りあいが立候補したから、その人に票を入れてくれというレベルです。

在日韓国人が韓国の地方選挙の参政権をもっていたとして、どの候補に入れようにも、その候補は私たちオールドカマーにまったく関心がありません。だいいち、選挙の公約がうんぬん書かれていても、その公約が書かれている韓国語を読めない。こういう残酷な仕打ちを受けます。韓国の総領事館や大使館で投票するときにいつも思うのですが、もう少し在日韓国人に対する選挙を盛り上げるような運動やサービスをすればよいのではないかと思います。たとえば、おもな候補の選挙公約はどういうものがあるかを日本語で説明するなどすればよいのですが、こういうこともしません。

いまから4代前の駐日大使（権哲賢^{クオン・チョルヒョン}）は、在日問題に対する関心がとても深い人でした。彼は在日韓国人

と本国社会との関係について、もう少しきちんとした研究者を集めて、研究会を開きたいと言っていました。こうして、大使館の研究会がブロックに分かれて始まりました。もしかしたら小倉先生もどこかのブロックに入っていたかもしれません。私は在日ブロックに入って、いろいろと情報交換をしました。

それまでの領事さんたちは、大統領選挙のときに「在日韓国人の投票率がこれくらいまでいかないと、君たちに対してはなにもしてやらない」と上から目線でした。わからなくてもよいから、とにかくおじさん、おばさんを投票所に連れて行って投票させなさいと。そのためにバスを出したり食事させたり、なんでもやれと。私はすごいやな印象があつたのです。

そんなことよりもすべきなのは、選挙の内容について、あるいは候補者がどういうスローガンを掲げて、どういうかたちで政治を動かそうとしているのかを伝えることです。もっと聞きたいのは、それぞれの候補者たちが大統領に当選したら、在日同胞になにをしてくれるのかということです。

ところが、ほとんどの候補者は、在日同胞にあまり関心がありません。彼らがしていることは、「このお金を民族教育に使いなさい」と、年に8億円くらいのお金を民団（在日本大韓民国民団）の中央本部に渡すことくらいです。これがいままでずっとつづいてきました。

国籍と実態のズレが苦しみの元凶

母語や母国語の問題が、ニューカマーとオールドカマーを考えるさいの大きな課題になると思います。ニューカマーのなよりの強みは、韓国語ができることです。母語も母国語も英語で言えば「マザータング」ですが、日本語では、母語は最初に身につけたことばで、母国語は自分の国のパスポートに書かれることです。在日のオールドカマーは、母語と母国語とがかい離しているのです。私のような日本で生まれたオールドカマーは、母語は日本語ですが、母国語は韓国語です。かなしいことに、母語である日本語で、母国語である韓国語を勉強しなくてはならないのです。

ところが、ニューカマーは逆です。母語と母国語はともに韓国語で、外国語として日本語を身につけます。彼らは戦後、とくに1980年代から90年代にわざわざ日本にやってきた人たちですから、オールドカマーとは決定的にちがいます。日本語は「あたり前田のクラッカー」のように流暢です。スラスラと日本語をしゃべると同時に、韓国語は最初から身につけている人たちです。最近の選挙が近づくと、こういう人たちが韓国からダイレクトに国会議員を呼んで、ミニ集会を開きます。そこで韓人会が国会議員に「これだけお金を渡すから、こういうことをしてくれ」と言うのです。ズバリ、対日政策を要求するのです。

最近のケースでは、慰安婦像の問題があります。慰安婦像の移転をめぐる日韓合意を守るか守らないかについて、韓国の大統領選挙で各候補の意見が分かれています。韓人会としては、さらに慰安婦像が韓国各地にできると、新大久保での営業がむずかしくなると考えています。ビジネスにマイナスの影響を与える

から、次の大統領には慰安婦像の移転を公約に掲げる人をどうしても当選させてほしいと、ズバズバと剛速球で要求を投げるのです。その裏で政治献金もします。だから、そういう韓人会の人と、韓国語ができない民団の人には大きな違いがあります。

在日の耐えられない「重さ」

このようなやり方をできるのがニューカマーです。しかし、在日韓国人のみながそのようなやり方をできるわけではないので、オールドカマーとニューカマーのあいだには葛藤が芽生えているのが現実です。オールドカマーは歴史的な経緯をもって日本に滞在しているので、葛藤があるのだと思います。

鄭大均さんはいろいろと優れた業績を残しておられますが、その一つに『在日・強制連行の神話』という本があります。在日強制連行説に対する疑問を投げかけた本で、内容について違和感をもちましたが、すべての在日コリアンが強制連行の被害者ではないという主張は当たっていると思います。

たとえば、私の父は1925年に出稼ぎ労働者として渡ってきましたから、強制連行されたものではありません。強制連行かどうかについては、私も自分の論文のなかでデータを用いて検証しました。1939年から1945年の労務動員計画の時期に日本にきて、そのまま日本に住みついた人は在日韓国人の人口のおおよそ20%前後を形成しているというのが私の推計です。

反対に、80%前後は自分の意思で出稼ぎ労働者として日本にやってきた人たちです。自分の意思としても、日本が朝鮮で植民地開発政策として行なった、土地調査事業や産米増殖計画などが関係しています。これらの開発事業で食えなくなったから日本にやってきたという意味では、日本の植民地開発政策が日本への労働力移動を促したのは事実です。しかし、すべてを強制連行説で理解するのには疑問を感じます。

ただ強制連行説という重い十字架を背負わされている一世と、自分の主体的な意思で1980年から90年代に「日本で稼いでやろう」という気で日本にきた人とはアイデンティティに大きな違いがあります。自分の国より日本に未来があると、彼らはアメリカンドリームならぬジャパニーズドリームの幻想を抱いて日本にきた人たちです。こういう人たちとは、もとより気構えも動機もちがうと思うのです。

たとえば、世界中にいる韓国人が本国とのネットワークをつくりながら事業を展開するしくみがあります。OKTA（世界韓人貿易協会）という組織で、全国に支会を展開しています。私の友人たちはOKTAに入っていますが、商売で成功した人たちが集まって、アメリカやオーストラリア、中国などで世界大会を開いています。立食パーティなどでも、OKTAのメンバーが集まると、とうぜん韓国語でしゃべります。

みなは話をして盛り上がりますが、そこに一人だけポツンと座っているのが在日韓国人のオールドカマーの代表です。なぜかという、韓国語ができないからです。在日韓国人の代表がパーティのなかではじめないをする原因は、英語もできないからです。ところが、ほかの国にいる韓国人は英語も韓国語もできます。とにかく、在日のオールドカマーはそこになかなか入っていけないことが、両者の大きなコンフリクト（摩擦）の要因になっています。

そんななか、韓人会が大きな力をつけてきて、領事館や大使館に直接圧力をかけています。本国から日本に出している8億円から10億円のお金の一部を韓人会に出せというようなことも言ってくる。民団のオールドカマーは、それはおかしいやろと反発しています。このような経緯で、縄張り争いが起こっているのです。あまり言いすぎると曲解されてしまうので、オブラートに包みながら言わなければならないのですが、こうしたオールドカマーとニューカマーの縄張り争いの問題は深刻です。

民族教育がかえって禍根を残している

葛藤の原因の一つとして、韓国学校での民族教育の存在は大きいです。民族学校と民族教育の問題でいえば、京都には京都国際中学・高等学校という学校があります。もとは京都韓国中学・高等科という名前でした。民族学校についてはみなさんも聞いたことがあると思いますが、いちばんすごい民族教育をしているのは、朝鮮総聯(在日本朝鮮人総聯合会)傘下の朝鮮学校です。北海道から九州まですべての都道府県に初級、中級、高級学校があります。さすがに北朝鮮による日本人拉致事件が問題としてとりあげられて以降は生徒数が激減しました。しかし、まだ熱心な民族教育がつづいています。

いっぽう、韓国学校についての民団の歴史的総括としては、自分たちの母語習得を保証すべき民族学校が日本全国に4校しかなかったことが最大の問題です。東京韓国学校と京都国際、それから大阪府の建国と

金剛学園、この4校しかありません。新しい学校としてはコリア国際学園などがありますが、それでも数校しかないことが問題視されています。

韓国系の4校のなかで、いま本国から注目されているのが東京韓国学校です。私はこの学校を見学しましたが、生徒数がどんどん増えています。入学できず、ウェイティングリストに載る子どもたちがいるほどです。新大久保を中心にニューカマーの人口が増大して、子どもを東京韓国学校に入りたいという親の思いがあるのです。

これには、もう一つ背景があります。東京韓国学校は、韓国の大学への進学率がものすごく高いことです。小倉先生も詳しいと思いますが、韓国では崔順実チエスンシルゲート事件がありました。占い師が朴大統領に呪いをかけて、大統領が機密情報をもたらした事件です。崔順実被告は乗馬しかできない自分の娘を、コネで梨花女子大学に入学させていて、これが国民の反発を買っています。韓国人にとって、受験は人生最大の勝負事です。受験してどこの大学に入るかが重要なのです。

日本とちがうのは、こういうことです。たとえば、京都には小倉先生が勤めておられる京都大学という超名門大学があります。大阪には大阪大学があつて、その次くらいに私の勤める大阪市立大学があります。ちなみに、私のゼミの卒業生は就職率100%です。自慢ではないけれど、就職先の多くは一部上場企業です。私のゼミに入れば一流の企業に入れるのです。私の力ではないのですが、なぜか全員そうです。びつくりするのは、競争率が100倍、200倍のテレビ局に私のゼミから毎年合格者が出ていることです。

日本の場合は、京大でも大阪市大でも、地方のそれなりの大学を卒業すれば一流企業に就職できます。

韓国の場合、ソウルにある大学以外を卒業したら絶望的な就職状況になります。少し大げさに言っている部分もありますが、就職はかなりむずかしいです。

地方の学生は、とにかくソウルにある大学に行かなければなりません。まずソウルの大学を受験して、落ちた人は大邱の慶北大学校に行く。慶北大学校は京都大学とならぶ地方の名門大学ですが、ここを卒業してもサムスン電子や現代自動車に就職するのはむずかしいです。ソウルの大学であっても、ソウル大学校、高麗大学校、延世大学校、梨花女子大学に入らないと、有力な財閥グループには就職できません。

ールドカマーは学校でも押され気味

受験生は死にもの狂いでこれらの大学をめざすのですが、東京韓国学校には裏ルートがあります。帰国子女枠ならば、比較的容易に名門大学に入れるのです。たとえば、上智大学の帰国子女枠などがあります。私も息子をこの枠で大学に入れたかったのですが、彼は「海外に行くのはいやや」と言うのでやめました。

けつきよくどうするか。子どもをよい大学に入りたいから、お父さんがあえて会社に異動願いを出して日本本社に行くのです。子どもを3、4年間、東京韓国学校に通わせて、帰国子女枠でソウルの大学に入れます。このほうがはるかにソウル大学校、高麗大学校、延世大学校には入りやすいからです。韓国の有名大学合格率ランキングのトップ50には、東京韓国学校が入っています。

しかし、ここで追い出されようとしているのが在日コリアンのZクラスです。つまり、zaminchiのZと書いて、Zクラスです。いま東京韓国学校は、全体の生徒数が二百数十人で、在日クラスの生徒数は20人くらいだと思っています。有名大学に進学させなければいけないので、先生は韓国語で授業をします。また、韓国の受験科目には討論のような科目があります。とにかく韓国人は、受験のときに討論して人を打ち負かせなければいけません。そんな授業をしているので、Zクラスの生徒はついてゆけないのです。Zクラスの力がどんどん弱くなるのに対して、本国クラスはどんどん膨張します。

以前、舩添要一さんという東京都知事がいらつしやいました。舩添さんの施策でよかったことは、東京韓国学校の生徒数が膨張しているから、べつところに新校舎を建てるために公地を準備してくれと韓国政府から依頼されて、朴大統領と合意したことです。こうして、第二東京韓国学校がつくられる予定でした。ところが、舩添さんのあとを引き継いだ小池百合子知事が合意を撤回したのです。なぜ国有地に外国人の学校をつくる必要があるのか、そのような合意は白紙撤回しますと彼女は言ったのです。

そういう意味で、これから外国人学校をどのようにしてゆくかを考えなければいけません。話がわきに逸れますが、日本人は「外国人学校に日本が助成するのはよくない」、「日本はあくまでも日本人の学校を育てなければならぬ」と考えます。これは大きなまちがいで、必要なのは生徒にとって進学先の選択肢を増やすことです。

もっと外国人学校を認知してほしい

神戸市には神戸中華同文学校がありますが、この全生徒数の4分の1は日本人に開放しています。いまは日本人クラスの志願者がものすごく増えて、競争率が高いです。なぜかというところ、日本の保護者のなかには、これからは子どもに中国語を習わせないと21世紀では生き残れないと考えている人がたくさんいるからです。

こう思うのは、韓国も同じです。中国はいろいろと問題のある国で、アメリカによる韓国へのTHAAD（高高度ミサイル防衛システム）配備の問題をめぐって、韓国人は中国に激怒しています。それでも中国と商売しなければならない。

10億人以上の人口をもつ中国と喧嘩しているのがロッテです。韓国軍の所有地と交換することを条件に、ロッテは自社のゴルフ場用地を差し出して、そこにTHAADが建設されます。だから、いま中国では「ロッテのチューインガムを食べるな」とよびかけているのです。ロッテの営業は、どれだけ苦しくなるでしょうか。中国に喧嘩を売った企業として、ロッテはもうたいへんな状況になっています。

韓流スターも中国に入れませんし、韓流スターのドラマも中国では放映されません。このままTHAADを導入すると、中国は韓国と国交を断然するとまで言って脅かしているのです。それでも韓国は、中国と関係を維持しなければいけません。韓国の貿易の4分の1は、対中国貿易が占めているからです。

中国とこれからどう向き合うのが問題です。いやなものをぜんぶ切ることはできないのです。みなさ

ま方も小学校、中学校、高校時代を思い出してください。クラスのなかに、どうしても言うことを聞かない暴力的な子がいたでしょう。でも、なんとか折り合いをつけて、そういう子を味方にして、学校生活をのりきっていかねばならない。

こういう意味で、私は中国の人と柔軟な関係性をつくるのが重要だと思っています。思えば、ひとむかし前の私たちのときは、カナディアン・スクールやアメリカン・ハイスクールなどがブームになった時期がありました。私は中学生のときに、まったく勉強しませんでした。高校受験のときに、父が「おまえ、英語くらいできないとあかんやろ」と言って、神戸の垂水にあるカナディアン・スクールに入れると言いだしました。私は「英語なんてできへんし、むりや。やめてくれ」と泣き叫んで、日本の公立学校に入れてもらいました。いま考えたら、父のいうとおりカナディアン・スクールに入っていたら、学会で苦労することはなかったでしょう。

むかしは英語を話せたらよかったのです。ところが、いまは中国語を話せないといけない時代です。中国語を話したい日本人がたくさんいます。日本の学校に入るのか、アメリカン・ハイスクール、カナディアン・スクール、あるいは神戸中華同文学校に入るのか。自分の子どもの可能性を切り拓こうと思ったら、外国人学校も一つの学校として認めるような国際教育戦略をとらないといけません。「日本人は外国人の学校の面倒はみません」という考えでは、私はだめだと思うのです。こういう意味で、東京韓国語学校の第二学校ができたらいなと思うのです。

多国籍化の流れを止めてはいけない

韓国系の民族学校には、じつは日本国籍の子もたくさん通っています。みなさんはあまり知らないと思いますが、朝鮮学校も同じです。朝鮮学校に通っている子はみな朝鮮籍かと思ったら、そうではありません。韓国籍の子もいますし、日本籍の子もいます。

おもしろい例が、『GO』という金城一紀さんが書いた作品に象徴的に出てきます。たとえば中学まで朝鮮籍だった子が、高校入学と同時に韓国籍になって、就職のときに日本籍になることがあります。一生のうちに3回国籍が変わる子は、なんぼでもあります。おもしろいことに、おじいさんが朝鮮籍、お父さんが韓国籍、本人は日本籍というように、三つの国籍をもつ家族が一つ屋根の下で暮らしていることもあります。

日本社会でも、こういう国籍の人たちと共存するなかで、いろいろと交流して多様化してゆきます。オールドカマーとニューカマーの対立という問題の話をしましたが、ニューカマーは、国籍の問題を私たちより柔軟に考えています。おそらく私はオールドカマーのなかでいちばん多くニューカマーの友だちがいると思います。最近、日本国籍をとる人が多くいます。ときに、なぜ朴先生は韓国籍にこだわっているのかと聞かれることがあります。「あなたみたいに下手な韓国語しかしゃべれなくて、顔も日本人っぽい人が、なぜ韓国人の代表みたいな顔でテレビに出ているんだ」と。

私としては韓国籍にこだわっているつもりはありません。ただ一つ、自分の信念として思うことがあります。日本を、韓国籍で生きることが不利益になるような国にはしたくないのです。もう一度言います。

この日本を、韓国籍が不利益になるような国にしたくない。それだけなのです。これが保証されたら、私はよるこんで日本人になりたいと思います。

韓国のほうが現実的なことをしている

この数年のあいだに、韓国は国籍法を一部変えました。世界中に韓国人はたくさんいます。在外同胞政策の一環として、これからの韓国政府はこの人たちを排除するのではなくて、彼らと協力しながら韓国社会を活性化するために改正したのです。韓国の人口が減少期に入るなか、むしろ重国籍を認めたほうが人口は増えるという単純な発想です。その第一段階として、各種の条件に合致する人には重国籍を認めるという法律に変わりました。

この改正された法律を丹念にみると、いちばんわかりやすい例は次のようなものです。これまで、日本で韓国人と日本人のあいだに生まれた子どもは、満22歳に達するまでにどちらかの国籍を選択しなければいけませんでした。ところが、韓国の新しい国籍法によると、韓国は重国籍を認めるので、22歳を過ぎても重国籍のままであることを保証されます。

また韓国の発展に貢献した人に対して、こういう条件をそろえていたら重国籍を認めるという条項があります。さらに、この条項には「博士号取得者」と書いてありました。私は大学院で博士号をとりましたから、

まず日本国籍になって、博士号を取得した者として申請すれば韓国籍に戻せます。こういう方法を考えると、一つの国籍に縛られるという生き方は、もう古いのではないかと思います。

ニューカマーの柔軟性がうらやましい

私たちオールドカマーとちがいが、ニューカマーは国籍に対して柔軟です。彼らは韓国籍でもかんたんに永住権をとれるし、将来は日本国籍をとってもよいと考えている人、そしてじっさいに日本国籍をとった人もたくさんいます。そのまま金、李、朴などと名乗っている人もいるし、どうどうと日本名を名乗っている人もいます。こういう人たちを見ると、私のように日本に住んで60年間、モヤモヤと悩んで生きるよりも、ニューカマーのようにスカッと生きるほうがよいのではないかと思います。

おどろくべきことは、この柔軟さは教育についてもあてはまりません。ニューカマーには、子どもを兵役に行かせる人が多いのです。この数年間で在日社会にいちばん衝撃が走ったのは、在日韓国人の子どもに入隊令状が届いたことです。民団に衝撃が走りましたが、調べたらこれはまちがえて送られたのだとわかりました。

それから韓国の兵役法は変わりました。在日韓国人が韓国に留学しても、何年間か韓国に滞在したら自動的に兵役義務が発生するシステムになりました。滞在日数を1日でも超えたら徴兵されますから、親た

ちは自分の子どもが徴兵を免れるようにしています。かつて日本にきた留学生にも、徴兵を免れたいから日本にきた人がいるほど、徴兵制の問題にはセンシティブでした。しかし、あるニューカマーのお父さんは、息子をいちばん厳しい海兵隊に入れました。「なぜそんなところに息子さんを入れたのですか」と聞くと、「あの厳しい海兵隊は、ちよろい日本の学校よりもよい。海兵隊を出ると、どんな企業にも採用される」と言うのです。

その人のおっしゃったとおり、彼は海兵隊から戻ってきて三菱商事や三井物産など総合商社五つに内定をもらいました。「韓国の海兵隊にいました」と説明したら、ほとんどの人が「それだけつらいことをしたのなら、どんな仕事にも耐えられる」と思うようです。

ニューカマーには、祖国とうまくつながりながら、ある意味で祖国をうまく利用しながら、日本社会で柔軟に泳いでいるという人たちがたくさんいます。これを見て、私は在日であることのモヤモヤを背負ってきた人間として、ニューカマーをうらやましく思うときがあります。



オールドカマーは頭が固い

オールドカマーとニューカマーの違いをきわだたせる例として、先祖をまつる祭祀チエサがあります。キリスト教徒の方は関係ないかもしれませんが、私の



家（ミリヤン・パク）はもとと密陽朴氏の長男の直系です。私の家に族譜（オソアゲ）があつて、密陽朴氏の歴史が描かれています。

たとえば、私の父は事業で成功してお金儲けをしたので、国に還元したいと言っていました。慶尚南道の道庁所在地である昌原市（チャソン・オン）から少し西に行った咸安郡（ハマン）が私の田舎ですが、ここに200坪ほどの土地を購入して巨大な墓をつくったのです。日本で墓が200坪なんて人がいるでしょうか。これは広すぎるお墓です。そこに、同じルーツから派生した朴氏の墓が50個くらい並んでいるのです。

そのうちの一つに私の父は眠っているのですが、咸安郡にある巨大な墓で年に1回、200人くらいの一族が集まって、祭祀の大会をします。どのような用事があつても、この祭祀を休んではいけません。たとえ大学の授業や教授会があろうが、祭祀を優先します。勤め先に休暇願を出して、参加しなければなりません。少し前までは、年に24回の法事がありました。法事、法事、法事と、スケジュール表が法事だらけになります。父が亡くなるとき、遺言状に「これからは法事を減らす」と書いてもらつて、やっと回数を半分にしました。いまはさらに減らして、年に数回になりました。それくらい、法事を厳格に守りつづけているのがオールドカマーです。はつきり言つて、本国の人よりも厳格です。

ときどき私が話したら、「嘘を言うてるやろ」、「あいつは大げさに言うてるやろ」と思われるくらいですが、ほんとうのことです。私が小学生のときの祭祀で、とくに覚えていることがあります。父が祭壇の前で手を合わせるときに、左手の親指と右手の親指の順番をまちがえて、先に逆の指をおろしてしまいました。す

ると祖父が怒って、包丁で父の首をガーッとかき切ったのです。血がバーツと飛び散って父がバタツと倒れたときに、母はすぐに味噌のようなものを傷口に貼って出血を止めました。父は病院に運ばれて、奇跡的に助かりました。血だらけになった父を見て、その前で祖父は「ハーツ」と言っていました。そのくらい法事は厳格にしなければならないと、オールドカマーは教えられるのです。

これは、異国において自分たちの生き方を守るためには、本国の人よりもちゃんと祭祀を遵守せよという祖父の教えだったと思います。

同じことをくり返したら、やがて消えてゆく

結婚についても、オールドカマーとニューカマーにとっては転換期がきています。在日同胞どうしで結婚するのがむずかしい時代がきたと思います。これからは、在日韓国人と日本人との結婚が増えると思います。食生活についても、ニューカマーが韓国料理を好きなのはわかります。しかし、不思議なことがあります。朝鮮奨学会のキャンプで在日コリアンの高校生100人くらいに食生活のアンケート調査をすると、いちばん食べたいものは、寿司や天ぷら、イタリアン、フレンチでもなくて、やはり韓国料理を食べたいという答えが圧倒的に多かったです。日本に帰化しても、韓国にルーツがあると意識しているのです。韓国語はできないが、韓国料理は好きだと言う人もいます。

いま、民族のアイデンティティは多様化しています。ニューカマーは、いまはバリバリのコリアンですが、やがて二世、三世、四世の時代を迎えたら、いまのオールドカマーと同じようになるのではないかと思います。もしニューカマーがオールドカマーと同じ道をたどったら、自分たちの子どもも韓国語ができなくなってしまう。彼らは、こういうことをしていると韓国人でなくなると、オールドカマーの生き方を反省材料として考えているのです。だから、ニューカマーは民族の教育に対して意識が高いのかなと思います。時間になりましたので私の問題提起はこころにしたいと思います。あとは、質疑応答で対応したいと思います。

司会 ● 朴先生、ありがとうございました。まだまだお話を聞きたいのですが、いったんここで休憩をとらせていただきます。次は、質疑に応答しつつ、お二人に対談していただきたいと思います。質問票には、お二人にお聞きしたいことを書いていただいて、それをもとに第2部を進めたいと思います。よろしく願います。(了)

連続フォーラム「チョゴリときもの」No.24

今を生きる在日コリアン
オールドカマーとニューカマー 第1回

在日韓国人のオールドカマーとニューカマー——そのホンネとタテマエに迫る

第2部 対談

日時 ● 2017年3月4日(土)

場所 ● k o k o k a 京都市国際交流会館

進行 ● 小倉紀蔵氏 京都大学大学院人間・環境学専攻教授

講師 ● 朴一(パク・イル)氏 大阪市立大学経済学部教授

※所属や役職等は、フォーラム開催時のものです。

司会 ● ありがとうございます。時間になりましたので、第2部を始めます。質問票にたくさんのご意見、ご質問をいただき、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

小倉 ● ここからは、みなさんからいただいたご質問を中心に進行します。その前に、朴先生が用意された資料の三番目のいちばん下をご覧ください。おそらく、みなさんもお知りになりたいであろう部分です。朴先生は、さきほど民団（在日本大韓民国民団）と韓人会（在日本韓国人連合会）のお話、そして「日本と韓国とはざまで生きる」のお話をされました。「在特会（在日特権を許さない市民の会）とヘイトスピーチ」、「在日コリアンの未来予想図」は、さきほどお話しされなかったようです。まず、かんたんにこの二つにふれていただきます。そのあとに、みなさんからのご質問にお答えしたいと思います。

「在特会とヘイトスピーチ」に関するご質問もありますが、この場で朴先生にお話しいただき、ご質問に対する答えに代えたいと思います。お願いします。

移民に対する不寛容があふれている

朴 ● 「在特会とヘイトスピーチ」というテーマですが、まずは世界的な傾向をみてみましょう。たとえば、イギリスがEUから離脱したのは、移民による社会への負担を危ぶむ声が強いことが背景にあります。つまり、

移民排斥運動です。移民と自国民とが共存するシステムをつくろうにも、とつぜん入ってきた移民たちが充分な税金も支払わないまま医療費や教育費を蝕む。これによって自国民が生きてゆくのすら不安定な社会になるのではないかという思いが強くなり、移民に対する排斥の声が強くなっているのです。アメリカでドナルド・トランプ大統領が当選した背景にも、メキシコからの不法移民の増大があります。ヒスパニック移民によって、白人ブルーカラーの職が奪われたという認識が強くなるのです。

その現れの一つとして、在特会の結成やヘイトスピーチがあるのだと思います。「在日特権を許さない会」といっても、ほんとうに「在日特権」というものがあるのか。私はいくつか論考を書かせていただきました。彼らが主張する在日特権の一つは、通名を名乗る特権です。通名を名乗る苦しみがあると同時に、通名を名乗る「特権を得ている」とも言われてしまう。なんでもそうですが、光と影があります。みずから名乗っているのではなく、通名を「名乗らされている」人たちもいます。

「在日の人たちにだけ、たくさんのお名前がある。日本人は一つのお名前しか使えないのに」と考える人もいます。たとえば、日本人の学生が「先生、授業では私をオードリー・ヘプバーンと呼んでください」と言ったら先生は「よべません」と言うでしょう。「在日の子には、それが認められているようなものではないか」と言われれば、そうかもしれません。その反面、在日の人には名前を日本風に変えなければ差別されるという状況があります。これを考えると、在日特権は存在するのかもしれないのか、わかりません。

在特会の人たちがよく言うのは、「在日の人には税金を払っていない」ということです。一部のごく限られた地方自治体では、たしかに一部の在日住民に対して特別に減税が行なわれていました。こうした一例をあ

げて、在日の人すべてが税逃れをしていたかのような風潮がひろまってしまふ。この風潮をつくり出して
いるのは在特会です。在特会の人たちは「日本人社会のなかで、特権を与えられる人を許してよいのか」と
いう主張を掲げてデモ行進をして、「朝鮮人、ゴキブリ、死ね」などと未成年の子どもにも言わせる。警官隊
に守られたデモ隊が大阪の鶴橋や東京の新大久保を歩いているのをなんとか目撃しました。

いまは「生みの苦しみ」を乗り越えるとき

私からみれば、これは多文化共生社会になるための、一つの過渡的な「陣痛的現象」ではないかと思います。
つまり、生みの苦しみのなかで、こういう副作用がたくさん生まれるのです。どこの国でもそうですが、す
んなりと多文化共生社会に移行できるわけではありません。移行の過程で摩擦や副作用が生じます。移民
たちは「二級市民」から「一級市民」になるまで、つまり日本人と同じ権利を得るまでに、さまざまな攻撃に
さらされながら多文化共生社会に近づいてゆくのです。

私の祖父の時代、朝鮮人はある意味で「人間以下」の扱いをされていたと、父が言っていました。いっぽうで、
じつは日本人に救われてきたという思い出話もあります。全体的に考えれば、圧倒的多数の日本人はイギ
リスやアメリカにくらべて、外国人に寛容なのではないかと私は思います。しかし、一部の人たちが抱く「移
民が自分たちの世界を脅かす不安要因になっているのではないか」という問題意識は、深刻に受け止めな

ければなりません。この不安を解消するために、在日外国人たちも日本社会のなかで自分たちの生活を正してゆかなければならないと考えています。

息子には、いつもこう言っています。「私の時代は、とにかく日本人に勝たなければいけないと教えられた。私は、いつも小学校の運動会がつかった。足が遅かったから、このままだと一等がとれない。考えに考えて、ピストルが鳴ったらすぐほかの人の足を引っかけて、全員を倒して走って一位をとったことがあった。けれども、そんな卑怯なことまでして、おまえは一等になる必要はない。二等や三等でもよいから、日本人たちと正々堂々と戦え」と教えています。

いろいろな思いがあつて、一世は二世に「日本人に尊敬される人間にならなさい」、「日本人に負けるな」と教えてきました。しかし、日本人も韓国人も日系ブラジル人も、人として助けあいながらどう生きるかを考える時代にきているのです。互いに足を引っ張りあつても、ろくな社会にならない。

困ったときに、国籍も人種もない

これを実感させられたのは、阪神・淡路大震災です。私が住んでいる兵庫県尼崎市でも、二十数名の方が亡くなりました。震災当日、尼崎市のあちこちで火災が起きました。寂しさのなかでいちばん苦しんでいたのは、一人暮らしのお年寄りでした。震災直後、息子といっしょに食料を買に行ったら、一人につ



き3個までしか買えませんでした。飲みものとパン一切れ、そしてミカンの一つ買った記憶があります。

食べものがないなかで唯一、ど根性で商売をしていたのが吉野家です。炎の燃えさかるなか、吉野家だけが牛井特盛を売りつづけていました。私は特盛を10個買って、一人暮らしのお年寄りの家に配ったことがありました。こういうときに、日本人も韓国人も関係ないのです。みなが苦しい思いをしているときに、国籍の違いを超えて助けあう社会をつくらなければ、こういう苦難は乗り越えられないと思います。

多文化共生社会は美しいイメージだけが語られますが、その実現までには「マイノリティや外国人が増えたら、犯罪が増えるのではないか」、「この人たちがきたら、社会保障の負担が増えるのではないか」、「あの人たちがきたら、ゴミ出しをしないのではないか」など、いろいろな不安が湧きます。とうぜん、ゴミ出しをしない外国人もいるし、犯罪をおかす外国人もいます。しかし、ひろい意味で日本社会に貢献する人たちを一人でも多く増やしながら、この少子高齢社会を支えないといけません。日本人だけでは産業がどんどん衰退してゆくのは目に見えています。

私も高齢者の一歩手前まできていますが、もしかしたらフィリピンからきた看護師さんや介護士さんのお世話になるかもしれません。日本人の若者たちだけでは、この少子高齢社会をとても支えきれない段階にきているのです。

ナシヨナリズムで意地になつてもしかたがない

小倉 ●まず、最初の方のコメントです。「たいへん興味深くお話をうかがっておりました。ときおり、『これを公共の場で話されてもいいのだろうか』と、先生の身を案じる場面もありました」。

次の方です。「日本を、韓国籍が不利益を受けるような社会にしたいとおっしゃった先生のおことは、力づくよく心に響きました。いつも感じるのですが、『外国人問題』と一般的な用語で語られるこの問題は、まちがいなく日本人の問題です。私は日本の公教育の場で働いていて、この問題を日本人の問題として考えることができる子どもを一人でも多く育てたいです。垣根を難なく越えられる子どもを育てたいと強く感じております」。

次は質問です。「『ニューカマー』というよび名はいつごろできたのでしょうか。それから、ニューカマーはオールドカマーを『パンチョッパリ』としてみるのでしょうか」。「チョッパリ」は日本人に対する韓国語の蔑称で、「パン」は半分という意味です。在日コリアンは半分日本人だと、韓国人から蔑視されることもあるのでしょうか。

朴 ●日本にこられるニューカマーたちは、それなりに日本に対する愛情や敬意、なにかを学ぼうという思いがあつて、いろいろなチャンスを求めて日本にやつてこられていますから、在日に対する偏見が少ない人たちが多いと思います。韓人会と民団の葛藤、ニューカマーとオールドカマーとの葛藤があります。いっぽう、

韓国国内でも在日コリアンに対する偏見が残っています。

そのことを最近とくに感じたのは、昨年から今年にかけて、崔順実被告による国政介入事件をめぐる、韓国ロッテが聴聞会にかけられたときです。現名誉会長の辛格浩（シンキョクホ）（重光武雄）さんの息子、辛東彬（シンドンビン）（彬）会長がたどたどしい韓国語で説明していました。そのようなを見て、「パンチョッパリは日本の手先だ」、「ロッテが韓国で儲けた金を日本にもって行くから、ああいうことが起こるんだ」と言っている人がたしかにいました。ロッテへの反発をみてもわかるように、偏見を抱く人は韓国人社会にもいるのです。

小倉 ● 私は留学で韓国に8年間住みました。そのときに感じたのは、韓国はウルトラ・ナショナリズムの社会だということです。異質な他者を排除する力が強いのだと、皮ふ感覚でわかる。大学の先生は授業中に「日本」という固有名詞を使いませんでした。「日本のやつら」だとか、もつとすごいことばでよぶのです。私はこれに対して抗議はしませんでした。大学の先生はみなそうよぶので、「私は日本人だ。そういう言い方はやめてください」といちいち言うことはできません。韓国はそういう社会なのだと思います。私は自分の意思で韓国に行ったので、そうでない人とは感じ方がちがうと思います。

民主主義をめぐり、極端な態度をとる日韓国

次のコメントです。「オールドカマーとニューカマーの違いがわかりやすく、ストンと腑に落ちた感じですよ。私は韓流ドラマのファンでもあります。在日の方や韓国留学生の方と交流して、一歩ずつでも彼らに近づきたいと思っています」。これもよい感想です。

私は、きょうのお話をおもしろくうかがいました。朴先生がおっしゃったように、オールドカマーがニューカマーに抱いている先入観や嫉妬があります。赤裸々にお話くださったことは、ほんとうによかったと思います。第三者として研究者の立場で話すよりも、朴先生のようなオールドカマーがニューカマーについて心のなかでどう思っているのかを話していただいて、おもしろかったです。

次の方です。「ハンゲルは少ししかできませんが、オールドカマーにもニューカマーにもたくさんの方の知り合いがあります。チマチョゴリが好きで、仕事でお世話になっている韓国の方もいます。朴先生には、国籍に関する考えを貫き通していただきました」。さきほど、朴先生からは国籍に関するお話がありましたね。そして、「これは日本人としての私の願いです。私は寂しいことに純日本人なのです」とあります。

次です。「私は長いあいだ、歌手のキム・ヨンジャさんの仕事をしてきました」。キム・ヨンジャさんはみなさんご存じですね。キム・ヨンジャさんのお仕事をされてきたとは、どういう方なのでしょう。

さて、次はご質問です。これは日本の若者に関することです。「最近の日韓の社会状況をみると、『韓国は民主主義を勝ちとった。しかし、日本は民主主義を与えられた』という認識を深くします。日本人は民主主

義のありがたさがわかっていないようで心配です。この状況にあまり声を上げない日本の若者をどう思いますか」。私は、日本の若者について在日コリアンの人がどんどん発言されるのはよいことだと思います。

朴 ● テーマから少し離れるかもしれませんが、おっしゃるように、日本は戦後にGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)から民主主義を与えられました。ある意味で民主主義を強制されたという言い方ができるかもしれません。いっぽう、韓国は1980年代まで独裁政権下にありました。朴槿恵大統領の父、朴正熙^{パクチョンヒ}さんの時代から、権威主義のもとで民主主義の言論は封じられてきましたし、労働運動も抑制されました。韓国は政治と戦いながら血を流し、1987年に民主化を勝ちとった国です。だから、神経質なほどに「民主主義を守らなければいけない」という強い意識があります。

いっぽうで、日本の若者たちをみますと、集団的自衛権の法制化から安全保障関連法制の制定をめぐつて自民党が強行採決に踏み切ったときも、安倍晋三政権の支持率は高いです。もちろん、韓国での朴大統領の弾劾裁判はゆきすぎがなきにしもあらずと感じますが、安倍政権の権威主義的な政治に対する日本国民の無関心な態度をみると、韓国と日本を足して二で割ったらまともな国ができるのという気がします。私は、両国に対して不安があります。

在日の政治的な発言を取り入れよう

小倉 ● どちらかというと、朴先生は「韓国に学べ」というご意見ですね。たしか、ほかのシンポジウムではそういうお話がありました。日本より韓国のほうがまともではないかという話ではなかったでしょうか。

朴 ● むかしはそう考えていた時期がありました。しかし、あまり日本を批判するとやられますから、最近では少し気弱になりました。たしかに、韓国人も日本に学ばなければならない点がいくつかあると思います。たとえば、権力の暴走にストップをかける民衆の力量には違いがあります。学生のデモなどがあるでしょうが、日本では学生運動が衰退しています。小倉先生より少し下の世代かもしれませんが、かつての京都大学、同志社大学、立命館大学などには政治的な立て看板がありました。学生が闘争をくり返しながら、自分たちの民主主義を守ろうともがいていた時代です。いっぽう、最近は学生たちとのコンパで集団的自衛権の話をしようなものなら、「先生うぜえ！」となります。もう少し、日本の政治の危機に対して声を上げて考えなければならぬのではないかと思います。

小倉 ● さきほど申しあげましたが、在日コリアン、とくにオールドカマーが、日本社会はこうしたらもっとよくなると発言されたらよいと思いますし、そういう声こそ貴重だと思います。参政権の問題やそのほかの権利問題だけではなくて、日本の民主主義や社会をどうよくしてゆくかについて、在日コリアンの意見を

どんどん取り入れる。テレビで朴先生や姜尚中^{カンサジュン}さんが発言されるのはよいことです。発言の比率がもっと増えなければいけないと思います。

次は男性のコメントです。「私は日本人で、妻は釜山^{プサン}育ちの韓国人です。子どももいます。朴先生のお話を聞いて、私は在日の方の心情を推しはかろうとしました。しかし、強制連行説がなぜ在日一世にとって重い十字架なのか、わからないので教えてください。在日の方には日本人に心を傷つけられた方も多いでしょうが、私のように韓国人と結婚して、いろいろな出来ごとで心が傷ついている日本人のことも忘れないでほしいです」。私も在日コリアンと結婚しているので、少しわかります。

朴●強制連行説は「一つの十字架である」という言い方をしました。「強制連行」ということは、じつは戦後につくり出された造語です。当時は「労務動員」と言い、広島や長崎の軍需工場、九州や北海道の炭鉱に連れて行かれた朝鮮人がたくさんいました。こういう人たちの末裔が在日韓国人だと思われる言説が、戦後の日本社会には少なからずありました。オールドカマーは、そういう重く暗い歴史を背負う人びとだと思われていることを表そうと、「一つの十字架」という表現をしました。

しかし、じつは強制連行で日本にきた人の末裔ではない人もたくさんいます。多様な契機で日本に渡って、たまたま韓国に帰らず日本に居着いて、現在に至っているという人もいます。ですから、在日のイメージをどう変えるかを考えて、私はもがいてきました。こういう意味で、ニューカマーの生き方はじつに「カラッとしている」。ジメジメしたイメージはまったくありません。日本社会にフレキシブルに対応しようとし

ているという意味では、彼らに学ぶところも少なくないのかなと思います。

小倉 ● いまのお話は重要です。「強制連行」ということばは、いまの学問の世界ではあまり使いません。特殊な左翼的な立場の人以外は、「労務動員」や「戦時動員」と言います。日本人と同じように動員されたわけ、こういう方が日本にたくさんいらつしたことはたしかです。ところが、動員された方の多くは、戦後すぐ本国に帰られたようです。さきほどの朴先生の推計では、日本に残られたのは六十数万人で、いまの在日の方のルーツのうち、20%が労務動員された方であろうということでした。

この数字は、朴先生のご研究だから信頼性が高いと思います。つまり、動員された方をルーツにもつ在日の方は多くないということです。80%は、多様な理由があるけれども、自発的に日本にやってこられたのです。日本で職を見つけるためだったり、教育を受けるためだったり、いろいろな理由です。この理由を生み出した要因は、日本が植民地支配で朝鮮を収奪したことによって、生活できなくなった人たちが日本で職を見つけようとしたことです。

オールドカマーのうち、強制連行で日本にきた人は多くないにもかかわらず、「強制連行だったのだ」という言説が定説化しています。歴史のよくわからない若い在日の人たちが、「自分は悲惨な強制連行をされた者の子孫だ」と、歴史上の事実とはちがう認識を刷りこまれている。これは在日社会から刷りこまれるのかもしれないし、日本社会から刷りこまれるのかもしれない。刷りこみによって、実態とかなりちがう自画像を身につけてしまう。とても非生産的なことだと思います。

在日が日韓の架け橋になればよい

私の妻は在日コリアンです。といっても、最初は朝鮮籍で、次に韓国籍に変わり、私と結婚後しばらくして日本国籍になりました。私は「やめてくれ、なぜ日本国籍を取るんだ」と止めたのです。しかし、「私はどうしても日本国籍をとる。あなたには関係ない」と言われてしまいました。

私の周りには在日のオールドカマーが多いですが、強制連行された人たちの子孫は一人もいません。「強制連行」という言説が大手をふってまかり通ってしまうことで、誤認や誤解が生じるのはよくないと思います。

次に、ご意見を紹介します。「在日韓国・朝鮮人の参政権の問題について。在日の人は60年以上、固定資産税、府民税、市民税、消費税を納めています。国民の義務を果たしています」。この方は、在日の人もとうぜん参政権をもつべきだというご意見だと思っています。

さて、最後の質問です。これはまた大きな問題で、慰安婦問題についてです。「慰安婦問題は日韓関係の問題ですが、在日の方との関係もあると思います。慰安婦問題への対応は、韓国人の総意でしょうか。この問題を制する方が韓国にどのくらいいるのでしょうか」。「制する方」というのは、韓国での議論にプレッシャーをかける人たちのことでしょう。直接には在日の問題と関係ありませんが……。それから、「慰安婦問題で冷えこんでいる日韓関係について」。これも日韓関係の問題ですが、少し在日のことに引き寄せてお答えいただけますでしょうか。

朴● 在日コリアンにも多様な意見があると思います。私は慰安婦のハルモニ（おばあさん）が住む「ナムムの家」に、二十数年間、学生たちと慰問をつづけてまいりました。その過程で、日本軍慰安婦を経験された多くのハルモニと友情をはぐくみました。訪問するたびに、彼女らはだんだん高齢者になり、天国に旅立たれた方もいます。慰安婦問題を歴史にとどめてほしいと願う人は数多くいましたが、日本と争ってほしいと願う人は一人もいなかった。建設的にこの問題を解決するために、私も日韓の仲介役としていろいろな人に会い、水面下で動いておりました。

一 昨年には日韓合意が成立しました。拠出額についての当初の要望は、韓国側が20億円、日本側は1億円ということで、数字にけっこうな隔たりがありました。しかし、あいだをとって10億円が日本から拠出されて、償い基金が成立しました。私は当初、この基金でナムムの家に代わる施設をつくったらどうかと思いました。ハルモニにはここに入ってもらい、心のケアをしたらどうかと。同時に韓国の日本大使館前にある慰安婦像を、新しい施設に移転することで収束できないかと考えました。そう思って、いろいろな人によりかけたのですが、残念ながらうまくいっておりません。もう一つの大きな問題は、この問題を妥結した朴大統領が弾劾を受けて辞任し、慰安婦問題が迷走しているというつらい現実です。

新大統領の選挙が4月から5月に行なわれますが、候補の何人かは新しい考え方を表明されています。有力な候補の一人には、この慰安婦問題の妥結を遵守して、着地点をどこかに見出さなければいけないと苦心されている人もいます。むしろ現在、韓国には「日本を許そうではないか」という声があります。「日本を許す」という表現について、一部の日本人には「ことばの使い方としてはいかがなものか」と思われる人が

いるかもしれませんが。そろそろこの問題に区切りをつけて、ハルモニたちが心安らかに天国に行けるよう、日韓が着地点を見出すことが重要な課題であると思っています。

新しい大統領が誕生したときにはこの問題が解決できるように、私もこれからいろいろなかたちで尽力したいと思います。

小倉 ● 慰安婦問題は、在日の問題と関係しますか。

朴 ● 慰安婦問題がネックになって、在日に対するヘイトスピーチが増幅されるのです。慰安婦問題が政争の具になって、その不満が在日コリアンにぶつけられているという現実があると思います。これはおかしいことで、ハルモニたちも望んでいません。在日の人が被害を受けるからこの問題を解決してほしいのではなく、戦争の性暴力はどこの国でもあるのですから、日本が率先して解決のお手本を示してほしいのです。このなかで在日コリアンが尽力すれば、在日の存在意味もあると思います。

ニユーカマーも、やがてはオールドカマーになる

小倉 ● 最後に、「在日コリアンの未来予想図」をお聞きになりたい方がたくさんいらっしゃると思います。

これについて、一言だけお願いします。

朴 ● ニューカマーにとって、オールドカマーは「未来予想図」になりうると思います。ニューカマーも時間がたてばいまのオールドカマーに近づいてゆくという、一つの未来像がある。よい意味でも悪い意味でもそうです。オールドカマーは苦難の歴史の結果として、いろいろな権利を獲得してきたけれど、課題も残してきた。たとえば、民族教育の面などです。ニューカマーには、この課題を克服しながら、どうやって日本で共生の道筋をつくるのかという大きなテーマにチャレンジしてほしいです。この意味で、オールドカマーはニューカマーにとってよい教科書になると思います。

小倉 ● 最後のおことばで、明るい未来が見えそうです。

朴 ● 少し宣伝してもよいでしょうか。3年くらいかかって、『在日マナー戦争』という本を出しました。在日コリアンの歴史を、信用組合の歴史をとおしてふり返るという内容です。この講演に関係することでは、マルハンの韓昌祐^{ハンチャウ}さんやMKタクシーの青木定雄さんの生きざまが書いてあります。よろしくお願いします。

小倉 ● ありがとうございます。朴先生の著書に『僕たちのヒーローはみんな在日だった』という本があります。ほかの本もおもしろですが、これはとくにおもしろい本ですから、ぜひ読んでください。私は2回も

書評しました。きょうはお忙しいところ、ありがとうございます。朴先生に拍手をお願いします。

朴 ● ありがとうございます。(拍手)

小倉 ● 来週3月10日の金曜日、「チョゴリときもの」を開催します。次はワークシヨップで、お話を聞くだけでなく、みなさんで在日問題を考えてみましょう。ぜひご出席ください。ありがとうございます。

司会 ● 朴先生、小倉先生、本日はどうもありがとうございました。きょうご参加いただいたみなさま方、質問票等にご協力いただきました。ありがとうございます。

前半は朴先生から、ここでしか聞けない話をたくさん聞かせていただいたと思います。後半で、先生から「人として」ということばがありました。このことばと、小倉先生から出た「知る」ということ、つまり「真実」を当事者の方から聞いて知る」ということが大事なことのだと、私もあらためて感じました。

これまで、「チョゴリときもの」の講演録を作成しております。シリーズⅡとしてスタートした21回目からは、本としては発行していませんが、ホームページからデータでご覧いただけます。ぜひ過去のものも読んでいただけたらと思います。本日はありがとうございました。(了)

連続フォーラム「チョゴリときもの」No.24

今を生きる在日コリアン
オールドカマーとニューカマー 第2回

ワークショップ「共に生きる、ということ」

第1部 講演会

日時



2017年3月10日(金)

場所



k o k o k a 京都市国際交流会館

進行



小倉紀蔵氏 京都大学大学院人間・環境学専攻教授

講師



洪淳道(ホン・スンド)氏 FTS総研代表

※所属や役職等は、フォーラム開催時のものです。

司会 ● 定刻になりましたので、ただいまより連続講演「チョゴリときもの」の二日目を開催いたします。みなさま、本日はご出席くださいますようお願いいたします。

このフォーラムは1992年度より、日本社会のなかの在日コリアンという存在に焦点を当て、それまでご自身の思いや意見を広く語る機会のなかった在日一世、二世の方から直接お話をうかがう取り組みからはじまり、これまでさまざまなテーマをとりあげてまいりました。第24回のテーマは「オールドカマーとニューカマー」、二日目の本日は「共に生きる、ということ」を本題に、同じ日本社会に生きる者として、さまざまな問題や未来をみなさまといっしょに考えます。

これまではパネルディスカッションや講演会の形式で開催してまいりましたが、今回初めて、聴いていただいたことをワークショップでシェアする機会を設けました。話しあう場ですが、あまりかたく考えず、気楽に楽しんでいただけたらと思います。

本日の講師はFTS総研代表、洪淳^{ホンスン}追々です。韓国籍の在日二世である洪さまは、慶応義塾大学を卒業後、金融機関にお勤めになりました。戦前、戦後の双方を知る洪さまから、本日は実体験をもとに幅広くお話を聴きできることと思います。進行役は京都大学教授、小倉紀蔵先生です。

本日の予定を申しあげます。第1部は講演会、その後は休憩をはさみ、第2部のワークショップに移ります。第2部は、参加のお申し込みのさいにみなさまにおうかがいしたテーマごとに分かれてグループ・ディスカッションし、その内容をあとで発表していただきます。最後にお二人からコメントをちょうだいし、終了となります。本日の様子は記録写真に撮らせていただきます。あらかじめご了承くださいますようお願い

い申しあげます。

それではお二方、よろしく願います。

小倉 ● お越しくださいまして、ありがとうございます。本日の前半は、洪淳道先生が講演くださいます。在日コリアン二世として、どう生きてこられたかというお話です。後半は、これまでにまったくなかった試みとして、ワークショップをします。5、6人ずつのグループに分かれて、みなでおしゃべりしていただきます。講演を聴くだけで帰るのではもったいないので、ワークショップでフィードバックして、ご自分と在日コリアンの関係はどうかをお話してください。最後に、グループごとにかんたんな2、3分間のプレゼンテーションをしていただこうと考えています。

たとえば「国籍、参政権のグループに入りたい」などとみなさんは意思表示されていますので、そのとりのグループ分けをしております。グループ・ディスカッションの内容は、前半の講演とは関係なくてもよいです。在日コリアンと日本社会が、どのように「共に生きるのか」について、ご自分の考えを率直にお話しくださいけっこうです。

ここに参考資料があります。ごく基本的なデータですが、何年になにが起ったのか、たとえば在日コリアンの指紋捺捺制度はいつなくなったのかなどを記しています。これを参考になさってください。

私と洪先生はワークショップのときにもこの会場にいますので、ご自由に質問してください。ワークショップでは、京都大学の大学院生が各グループに一人ずつついて司会進行役を務めます。「この点について、

ぜひ洪先生に聞きたい」ということがあれば、進行役の学生に言うてください。洪先生がそのグループに加わって補足説明をします。

それでは、洪先生のお話です。どうぞよろしくお願いいたします。

洪 ● みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました、洪淳道といいます。日本語読みでは「コウ・ジュンドウ」といいます。日本ではこの名前で通っています。

小倉先生と知りあいになって、先生からこういう講演会があるとご紹介いただきました。まさか私がお話しするなんて、考えたこともありませんでした。これまで商売のことばかりで、いいかげんなものの言い方ばかりしていましたから、はたしてみなさんにちゃんとお話できるかという不安はありますが、とりあえず先生に恥をかかせないようにトライしようと思います。よろしく願います。

100年前の苦境が、いまにつながっている

小倉先生に準備していただいた資料をご覧ください。1910年に日本が朝鮮を併合して、ざっと100年あまりがたちます。その頃の東アジアは、西洋列強の植民地政策が西から東に押し寄せてきて、中国がいちばんの戦場でした。たとえば、インドネシアはオランダにとられるし、ベトナムやコーチシナ*はフラン

スの占領地になった。マカオもポルトガルの植民地になりました。英国なんて、インドをとったあとにずんずんと中国に進出して、清朝の末期にとんでもなくひどいことをしました。

日本は対応が早くて、なんとか列強の犠牲にならないように、長州藩などが明治維新を実現しました。列強に乗り遅れないようにとがんばった日本の歴史は、みなさんも充分ご存じだと思います。

その頃の朝鮮半島は李朝末期で、排外的な思想をもっていました。その李朝がいろいろな国と駆け引きするなかで、朝鮮併合が起きました。日本は日清戦争で勝ち、日露戦争でかろうじて勝って、なんとかアジアのなかで生き残ろうとした時代がつづいていました。朝鮮半島南部に住んでいる人たちは、李朝がすっかりしていないものだから、貧困にあえいでいました。

日本列島と朝鮮半島とは、古来、人的な交流がつづいています。いろいろと資料を検証しても、人間の往来が古代から継続的にありました。日本では古代の歴史を完全に解明する作業はなされていないと思いますが、韓国側ではあるていど、古代の輪郭はわかっています。日本は天皇制の問題、たとえば天皇のルーツなどの問題がからんでいますので、なかなかハッキリと言えない状況があるのではないかと私は思っています。

さて、朝鮮併合後には人口の移動がありました。日本と朝鮮の関係が近くなったことによって、朝鮮半島の南部に住む困窮者たちが労働者として日本に出て、少しでもよい生活をしようとしたのです。朝鮮半島の北のほうでは、日本の統治をいやがる人びとが中国の北東部に移動しました。彼らは中国の人たちとトラブルを起こしながらも定住して、現在の朝鮮族のルーツになったのではないかと、私は考えています。

戦前の集団移住は、食べるためだった

私の両親は済州島の出身です。母が1902年生まれで、父が1904年生まれですから、母が2歳年上です。父が満16歳、母が満18歳で結婚しています。当時、女性は数えで20歳になっても独身のままだと、「行かず後家」とされたそうです。母は、なんとか父にもらってもらったのではないかと思います。

いまから20年くらい前に親族がくれた家系図（族譜）を見ると、私は45代目らしいです。こんなのはでたらめだと思うのですが……。日本の歴史をみても、適当に家系図をつくっているでしょう。私の家系図には「〇〇は郡長に馬150頭を送って、褒美をもらった」と書いてありますが、こんなものは証拠になりません。箔をつけるために、そんなことを書いたのではないかと思います。

済州島は朝鮮本島から少し離れたところにあります。反逆者はできるだけ遠いところに島流しにしようとするから政治犯の流刑地になっていたそうです。韓流ドラマにもそういう場面がよく出てきます。

済州島の中央にはかつて噴火した大きな火山があつて、阿蘇山の草千里のように、火口の周囲には草原があります。馬がよく育つところなので、家系図に「馬150頭」と書けば真実味が増すだろうという作偽があつたのではないかと思います。

父と母が結婚した頃、済州島の中心地である北側にくらべて、南側は遅れたところでした。島内の同じ村で、両親はいっしょになったようです。ちなみに、韓国では村のことを洞^{ドン}と言います。皆さんのなかに、韓国に行かれた方、済州島に行かれた方はいらっしゃいますか？ 済州島の出身者は、「おまえら、頭いい

んじゃないか」と冗談を言われることがあります。「政治犯の『種』をもらったんだろう」と、そんな嫌味を言う人もいます。



洪淳道氏、ソウルの景福宮にて

韓国で30年ほどビジネスをしていましたら、本土と済州島とは微妙に文化がちがうことがわかりました。済州島の人は、島国の人間だからと、差別の対象になるのです。社会の主流派にはなれなくて、「島のやつらは……」と言われる。日本もそうですが、身分制をはじめとして、韓国は差別意識が強いところです。父は単身で日本に出稼ぎにきたのだと思います。父はその後、40歳で亡くなりましたので、ルーツを語る機会なんてまったくありませんでした。日本と朝鮮を行ったりきたりしながら、なんとか日本で定住する力を得て、家族をよびよせたのだと思います。私たちの家族が移り住んだのは大阪市でしたが、日本に定住した在日常はいろいろな状況にいますので、十把一絡げに「在日常はこうだ」とは言えないと思います。

大阪市生野区には、大正から昭和にかけて、済州島出身の人たちがたくさん定住するようになりました。たとえば梁石日^{ヤンソギル}というこの地域出身の小説家は、おもしろい作品を書いています。『血と骨』という小説で、ビートたけし主演、崔洋一監督で映画になっています。DVDを見ましたが、済州島出身の人たちの生き方をかなり忠実に描いた映画だと思いました。



きびしい現実が家族をゆさぶった

私自身は、済州島にはまったく縁のない、在日の一人としての生き方をしてきました。父は日本に何回かきているあいだに、日本の女性とねんごろになって大事にされたそうです。どういうわけか知らないけれども、私が生まれた少しあとに、父は大阪市内で20人ほど人を雇って大衆理容店を始めました。そこでは韓国の若者たちに技術を教えていました。

若い時の父はとにかく大酒飲みで、放蕩をくり返していました。体がまったくダメになってから、日本によびよせていた母のもとに戻ってきました。その頃、キリスト教の伝道師と出会ったといいます。「ああ、自分の人生はまちがっていた」と父は改心しました。ピューリタンを信仰したら、それまでとは180度ちがう禁欲生活で、酒をやめ、たばこをやめ、女もやめました。30歳になったばかりでの禁欲生活の持続はとても忍耐が必要でした。時々母に暴力を振るう時もあったそうです。また、近所に住む在日の人たちのために友人といっしょに教会

をつくって、京都から牧師さんをよび毎週日曜に礼拝をしていました。

太平洋戦争の戦況が厳しくなった頃に、理容店は空襲の標的になるというので、店は取り壊しになり、家族全員を引き連れて茨城県の農村地帯に疎開をしました。大根やサツマイモ、トウモロコシも採れるから、そこから大阪にいる兄へ食料を送るということだったようです。

父は男だけの3人兄弟の三番めです。母は姉が1人、下に3人の弟がいて、長女だけが韓国に残って、ほかはみな日本に生まれました。父の兄弟で、父の次兄は韓国で結婚しましたが、奥さんとの折り合いが悪く、たまたま満州に逃げたそうです。

学がなければ苦勞するという教訓

けつきよく、父は若いときの放蕩がたたり、1945年2月に5人の子どもを残して疎開先で死んでしまいました。そのときに一言、母に対して「子どもの教育だけはよろしく頼む」という罪な一言を残しました。ですから、母はとんでもない苦勞をしました。余計なことを言って死んではダメですね。母のような無垢な人にそう言うのと、「もうこれしかない」と、忠実に従います。よく言えば、母は我慢強く、魅力的な人だったと思います。

母は父と共に信徒となり、キリスト教の教えを頭のなかに描いていました。まるで初期のキリスト教伝道

の時代に、キリストのエピソードを絵に描いて説話にしたように記憶をしたようです。そうして子どものわれわれにキリスト教の教えを叩きこむものだから、遠藤周作じゃないけれども、私は幼少からキリスト教の衣を着て育ちました。それを善いか悪いか判断するのは本人しだいですが、私は長いあいだ葛藤をくり返す事になりました。

だれかが犠牲にならねばならない現実

戦争中、疎開先の村の人たちはきわめてガードが堅く、よそ者が入ってくると、「こいつらはどういうやつらだろう」と疑いますが、心根のやさしい人たちですから、1年くらいたつと、気を許してくれました。姉たちは同じ村の子どもと仲よくなって、1946年に大阪に戻ったあとも文通をしていました。ですから、疎開はけっして悪いことばかりではなかったと思います。

疎開する前、私の兄は横浜の高専に在学していました。1945年に東京の大学に入る予定でした。9月には、「少尉任官で軍隊に行くのだ」と、すぐはりきっていたようでした。姉も東京の牧師先生の家に下宿して、女学校に行くのだと言っていました。

終戦を迎え、母親と子ども5人が大阪に戻ってきましたが、そうかんたんには生活できませんでした。大阪には父の兄もいましたが、彼はまったく余力がありませんでしたので、進学するのだと意気こんでいた

兄と上の姉は、家を支えるために働きました。私は下から二番めだったので、結果的にいちばん得をしました。家族の力でなんとか学校に行くことができ、結果的には私一人が東京の大学を卒業しました。下の妹も大学に行きたいとゴネたのですが、「女は大学に行かなくてもよい」と、諦めさせられました。

大阪の焼け跡でたくましく生きる

この頃、私の家の近所には居留民団（在日本大韓民国居留民団）という組織がありました。いまの民団の大阪本部です。建物は大阪市から譲り受けたもので、もとは研修所かなにかだったのか、たくさん部屋がありました。そこに朝鮮半島南部出身の人たちが大勢居住して、あたり一帯がにぎやかになりました。

大阪の東部は水はけが悪くて、生駒山付近に大雨が降るとすぐ水浸しになってしまいます。治水の一環として、運河を連結させて洪水を防止する工事をしたのですが、肉体労働をする人たちが必要でした。日本人は兵役などで海外に行く人が多くて労働力不足でしたから、済州島の人たちが噂を聞いて生野区付近に集まったのです。こうして、運河を掘削する仕事をし定住しました。

いまのコリアタウンとよばれる地域には、済州島出身の方がたくさん住んでいました。この人たちのあいだでは、戦後は朝鮮総聯（在日本朝鮮人総聯合会）の力が強かったようです。たくさん小学校、中学校、高校を建設して、民族教育をすることになりました。いっぽうで、民団はこの頃ほとんど力がありません

でした。

大阪駅近辺に住んでいる人たちにとっても、1950年に朝鮮戦争が始まったことが貧困から抜け出る大きなきっかけになりました。太平洋戦争の頃、京都はまったく爆撃を受けなかったと思いますが、大阪はひどいものでした。大阪城のすぐ東にあった大阪陸軍造兵廠（砲兵工廠）は徹底的に爆撃を受けました。隣接した大阪城はまったくの無傷でしたが、京橋駅の近辺は焼け野原になりました。

ここには不発弾がたくさん埋まっていましたが、屑鉄もたくさんありましたので、在日の人たちが殺到し、土地を不法占拠していた在日でも時々不発弾に触れ命を落としながらも屑鉄を拾って売れば十分に生活できるような状況が、何年もつづいたのです。

大阪駅前には闇市がありました。在日の人たちが繊維製品を始めいろいろな商売をするようになりましたが、なかには台湾の人たちもいました。朝鮮本土出身の人と済州島出身者、華僑ともども、パチンコや飲食関係、不動産関係などで在日の人がだんだん力をつけてきた時期だったと思います。大阪駅前には大阪華銀という信用組合がありましたが、この理事長はのちにチキンラーメンをつくった安藤百福さんでした。

つらい経験が「めぐりあわせ」の大切さを教えてくれた

大学卒業を控え、私を長いあいだ家庭教師として大事にしてくれた家がありました。この家の父親はロツテの社長といつもゴルフをしていて、「君、ロツテを受けてみたらどうだ」とおっしゃいました。しかし、



入社試験を受けてみると、日本人の中央大学の人が受かって、私は大学の推薦状までもらったのに落とされたのです。その家の父親に「じつは私、採用されませんでした」と言うと、「おかしいじゃないか、私が聞いてあげるよ」と社長に聞いてくれました。後日、社長は「自分には関係ない。採用は人事に任せている。私は関与していない」と言ったそうです。

「在日のやつらは人間の質が悪い」、「貧困層からばかりが日本にきていて、レベルが低い」、「こういうやつらが会社に入ってくると、問題を起こす可能性がある」と言う人もいました。こうして、私は東京での生活をあきらめました。大阪に戻り姉の知人の紹介で在日の金融機関を受け、その会社に入りました。この頃は、台湾人にしろ韓国人にしろ、日本の銀行に預金はできても、融資はまったくしてもらえませんでした。だから、小規模向けに、いろいろな金融機関を細かいチャンネルに分け、信用組合は業種別、地方別に分けて、貸出先を限定していました。大阪には三つの信用組合があり、一つは梅田にあった梅田繊維街を対象にした日本人、韓国人向け、残り二つは、韓国人だけを対象にしているものと、朝鮮総聯の人だけを対象にしたものです。

信用組合には、新しい事業を始めるための最低限の資金をサポートする組織で私が面接を受けると、二つ返事で「ぜひきてくれ」と言われ、「君を育てて、この銀行の幹部にしたい」という話がありました。1年間でいろいろな部署を回って、銀行業務を教えてもらいました。しかし、私はすなおな考え方ができず、いつも上役とトラブルを起こしていました。あの頃の私は、なにもわからないくせに生意気だったのだらうと

思います。サラリーマン落第生でした。

まわりからのバッシングもあり、結婚を機にこの会社を辞めようと思いました。結婚相手がたまたまコリアンタウンで育った女性だったので、いろいろな面で私と考えがちがいました。ビジネスライクに「金融機関に勤めたって、大した給料はもらえない。自分で商売をしたらどうか」と言われて、何回かトライはしたけれど、失敗つづきでなにもできませんでした。

でも、いろいろなことを経験するなかで、めぐりあわせが大事なのだと学びました。韓国易学には「パルチャ」（八の字）という考え方がありますが、これはめぐりあわせのことです。たとえば、旦那さんがあちこちで浮気して家をほったらかして、奥さんがナイーブになって、小さい子どもの前で、「なんで私がこんなひどい目にあうのだ。お母さん、どうして私を生んだのですか」と恨みごとを言ったり、お酒を飲みながらうっぶんを晴らすような情景をなんども見ました。人のめぐりあわせというのは不思議なもので、生まれた年数の違いで、私の兄や姉が犠牲になったように、年上が年下の人間を支えるのです。

孫正義さんも、久留米の国有地（＝無番地）で生まれ差別意識のなかで米国留学を決意した時、兄が代わりに進学を断念したと自身のブログで語っています。

後年、韓国で仕事をするようになって、韓国の中小企業と何十年もつきあうことになりました。あちこちの料亭や飲食店に連れて行かれましたが、ホステスさんたちは「家計を支えている」と言います。「弟が大学に行っているから、自分はこうして水商売で働いているのです」と。韓国のお店はチップ制ですから、お客さんがつかなかったら、その日はご飯だけ食べて帰らされます。私はこういうシビアな仕事

をしている人たちを見ってきました。

また韓国と向きあえたのも、めぐりあわせのおかげ

私が韓国との仕事を始めたのは、日本の商社の方の紹介で韓国に行って、紹介された友人が私に「きみも同じ韓国人だ。私は日本語ができるから心配しないで日本でがんばるだけで良い」と言って仕事を始めた。しかし1年たって、この人はもともとお金持ちのドラ息子で映画監督をしていた男ですが、ひどい遊び人だとわかりました。

この人は、ある日とつぜん高血圧で路上でひっくり返って死んでしまいました。韓国では、病院で亡くなった場合には家に連れて帰らず、病院で葬式を済ませます。お通夜にはみなが集まって、花札で遊んだりドンチャン騒ぎをします。喪主がかわいそうだから、場をにぎやかにして悲しみを減らすのだそうです。いまでもその風習がつづいているかどうかはわかりません。土葬した場合には、みなで音頭をとりながら土を足で踏んで固めるそうです。墓地には風水も関係があつて、お墓は南向きの日当たりがよくて水はけのよいところにつくります。何年かすると、お墓を掘り起こして、お骨をきれいに整理して埋めなおす風習があると聞きました。ずいぶん日本とちがうのだなと思います。

韓国に行つて勉強になったことは、日本人が忘れてしまった礼儀がまだ残っていることです。これはよ

いなど思ったのは、目上の人に敬意を払うことです。たとえば、目上の人といっしょにお酒を飲むとき、目下の人はかならず横を向きます。前を向いて飲むのは、年長の人の前ではよくないことです。ものを手渡すときも、かならず片手を添えて出します。ゲストやいろいろな人に対する対応を体がすべて覚えていきます。もちろん、お年寄りの前でタバコは吸わないと思います。あまり年配の人に気をつかいすぎるので、年配の人を横暴だな、やりすぎだなと思う場面もたくさん見てきました。しかし、日本人が忘れていたり、なくしたりしている礼儀作法は、見習ってもよいという気はしました。

韓国で人づきあいをするとき、みな人柄はよいのですが、お酒の席となると止まりません。食事が終わったあと、午前3時、4時、5時まで飲みます。朝9時の予定をどうしようかと思って、ホテルに戻ると天井がグルグル回るようなことは、なんども経験しました。

韓国語ができなくて困ったこともありましたが、得意先に行ったら、「きみ、韓国にきて韓国語をしゃべれなかったらダメだよ」と言われました。私は小さいとき、「両親が済州島の方言（済州語）で話すのを聞いていたものだから、私が話せるのは片言の方言なのです。一言、二言と話してみても、相手が無視したら」このことは通じない」とわかります。日本に戻ってからテレビや本で勉強して、韓国語を習得しました。

たとえば、話しながら相手のことを記憶して、そのとおりに話せるようにします。これを何年かしているうちに、韓国語と日本語でちがうのは、発音だとわかりました。韓国語は、話していることばの音を聞いて理解します。日本語は文字で理解します。漢字は表意文字なので、文字を見れば意味がわかります。韓国では、李承晩大統領の時代に漢字を追放して、すべてハングルにしました。いわば、アジアのなかでは

仮名のみで表記しているのは韓国、朝鮮だけです。これがビジネスではハンディキャップになるという指摘もあって、最近では、漢字をふくめた教育に変えようと、小学校で漢字を教えるようになったと聞いています。

日韓のはざまで得た収穫

長年にわたって輸出の仕事をしているなかで、一つ印象に残ったことがあります。一方的に日本に稼がせるようなことをしないで、韓国の商品を輸入して、収支のバランスをとったらどうだと言われたのです。紹介してもらった韓国の商品のなかに、激辛のインスタントラーメンがありました。このラーメンを伴侶に見せたら、「この辛いラーメンは、日本でかならず成功しますよ」と言いました。

日本の明星食品が、当時、三養食品サムヤンのグループと合併で会社をつくっていた記憶があります。韓国はまだ貧しい時期でしたから、即席麺は飛ぶように売れました。

いっぽうで、当時はロツテラーメンというものもありました。ロツテの創業者である辛さんには年下の弟たちがいました。弟の一人が激辛即席麺の製造を始めました。そのことで兄弟の仲がたいへん悪くなりました。「こいつは、おれがいないあいだに会社をぶん捕りやがった」と。辛さんは日本のビジネス書にこのことを書いたりして、恨みを公にしていました。

弟がつくったのは農心という会社で、いまは日本に現地法人があります。その後も「辛ラーメン」は定番としてつづいています。兄弟は正月のあいさつをする恒例行事のときでも、いまだに互いに顔を向けての交流はしないと書いていました。

私の会社は、合成樹脂を扱っていました。ソウルオリンピックの2年前、1986年くらいから激辛ラーメンを扱いはじめました。激辛ラーメンは賞味期限が6か月ですから、1か月か2か月以内に間屋さんから出荷できないと、購入してもらえなくなります。タイミングが合わずに売れなくなったものを、ダンピング（在庫処分）したら商品が死んでしまうので、なにかあるたびに民団に「寄付するから使ってください」ともって行きました。「成人の日などに、みんなのお土産にしてください」と寄付することをつづけました。しかも、コストがかからないように、会社の従業員に配達までさせたのです。「なんでプラスチックを扱っている会社が、こんなことまでやらなきゃいけないんだ」とずいぶん文句を言われましたけれど、我慢してやってくれと。

ほかの大手は、いちどにコンテナ二つ三つぶんを買いつけて、バーツと販売しようとしたが、途中でうまくゆかなくなりました。私の会社も2年か3年くらいは赤字でしたが、けつきよくは我慢くらべです。辛い食品はすぐに飽きますが、時間がたつとまた食べたくなるという作用があるようです。その頃、日本の若い人たちの食の嗜好は変わってきていましたから、なんとか我慢してやってみようと、このビジネスをつづけました。その結果、日本のマーケットはあるていど開拓に成功したかなと思います。

メーカーの人たちは、ものが売ればよいことばかり言います。たとえば、「あなたは愛国者ですね」と。

そんなレベルで仕事はしていませんが、「ふつうの日本人は、そんな熱意をもつてやりませんよ」、「目先がダメだったらあきらめますよ」などと言いながらも、「ブタもおだてりや木に登る」というように、適当に「そうか、そうか」と調子に乗ってみました。輸入しているうちに、煮込みタイプだけではなくて、カップタイプのものを開発したら売れるのではないかと提案したりもしました。このようにして、いろいろなビジネスを経験してきました。

濟州島の貧しさをふり返る

韓国政府は濟州島をリゾート地にしようとして、島のインフラに歴大な投資をしました。本土の企業は、過疎地といわれる南部地域にホテルを建てたり、ゴルフ場やリゾートをつくったりしています。もちろんカジノもあります。ここに観光客を誘致しようとしているのです。

私も、日本の仲間と時々ゴルフをしに濟州島に行くようになりました。洋芝のゴルフ場ですから、年中コンディションがよいです。あの島には「三多」ということばがあります。三つの多いものとは、「風」、「女」、「石」です。石が多いのは、火山があるからです。「女が多い」というのは、男はする仕事がないという意味です。男はなにをしているかという、いつも女の尻ばかりを追いかけている。このように、島の人は自嘲的なことをしょっちゅう言います。ですから、濟州島の人が労働力として日本にきたのも、うなずけるかな

と思います。

いっぽうで、「三無」ということばもあります。「泥棒がいない」、「乞食がいない」、「門がない」です。乞食がいないから、家に門をつけなくても、泥棒は入らないということです。機会があればみなさん、濟州島にぜひ遊びに行ってください。風の強い日のゴルフは大変ですが、食べものも美味しいし、景色もよいところです。濟州島ではむかしもいまも海女さんたちが漁業に従事しています。この海女の歴史が伊勢に伝わったという話もあります。

さて、いろいろなことをしながら、なんとか日本で生活してきました。私はほかの在日の人とはちがつて、あまり韓国人とのつきあいがありませんでした。周囲にはいろいろな人たちがいましたが、日本での生活はとにかくおとなしくしていました。戦後間もないころは、近所では、しょっちゅう巫女をよびドンチャカしていました。いま朴大統領との関係で問題になっている崔順実氏チェンシルがいますが、あの人はシャーマンの出身なのでしょうか？ 在日一世は、日本を客地キヤクチ＝他郷だと考える意識が強いんです。日本で功をなして、お金を儲けて、自分のふるさとに錦を飾りたいという人がたくさんいました。

濟州島でリゾートになっている地域に濟州民俗村があります。この地域出身の人は、大阪ですごくお金を儲けました。儲けたお金で地域に電気を通して電化をしました。

大阪の上本町に大きな御殿跡屋敷を買って生活していたのですが、その後、韓国からよびよせた母親をずいぶん大切に、いっしょに生活していました。その母親は韓国の風習が抜けませんでした。広い庭園の中に畑をつくって、野菜を植えて、そこから3 kmほど離れたコリアン・マーケットまで運んで販売しました。

この母親を見て、みなが笑うのです。「なんでこんな大金持ちのおばあさんが、こんなことまでするんだ」と。その息子は、黙認し親のするに任せました。母親が亡くなったときに、高野山の奥之院に豪華なお墓を建てました。いまでもまだそのお墓があります。

民族主義によって個人が試されるつらさ

私は、1980年代になって初めてパスポートをつくりました。それまで韓国とはまったく関係なかったのに、輸出が始まり、どうしても行きたいという思いが生まれたからです。

これよりずいぶん前の1959年、在日朝鮮人の北朝鮮への帰還事業が始まりました。当時の北朝鮮は「楽園」といわれ、日本での影響力は韓国より強かったのです。とくに生野界隈では、朝鮮総聯系の仕事をしている人がたくさんいました。

帰還事業では、新潟港で万景峰号という船に乗って、北朝鮮に帰る人が合計10万人ちかくいたと思います。大阪に住んでいた父の兄になる伯父は、息子にいろいろな問題があつて、伴侶も自殺してしまつて、娘夫婦といっしょに北朝鮮に戻りました。結果的には、生活に困つて北朝鮮に行ったのです。

生野区あたりから帰還した人たちが沢山いました。この人たちは、苦勞して大学教育まで受けたけれども、就職先がなかったのです。タクシー（白タク）の運転手など、いろいろな仕事をしている人たちはいましたが、

どうしても日本での就職はダメだとあきらめました。祖国に行つて、祖国のためにがんばろうと思いたつたのです。とくに理工系を出た人たちには、「将来の国を背負う技術者として、ぜひ祖国建設のために尽くしてください」という宣伝文句が投げかけられ、多くが北朝鮮に行きました。

さきほどふれたように、私の伯父にあたる人で、済州島で家庭を捨てて満州に逃げた人がいた話を話しましたが、その伯父は満州で抗日戦線に加わり、その功績で北朝鮮の幹部待遇を受けたようです。北朝鮮は、国の建設に貢献した功績によって、身分を26段階くらいにランク分けしています。在日は、国の建設のためになにもしていない人間だから、最下層のランクです。夢をもって北朝鮮に帰還した人が文句を言ったら、すぐに収容所に入れられました。帰還した先はたいへんな状況だと告発した記事が、この事業が始まってしばらくしてから出ました。

日本から長男が北朝鮮に行きましたが、弟の伯父と再会しコネで優遇されたかどうかはわかりません。いつぼうで、親が北朝鮮に渡ったあとに、息子がなんとか日本でそれなりの生活をするようになると、「自転車を送れ、あれを送れ」という手紙がくるという話を聞いたことがあります。

この時代、在日の人たちが日本で会社の規模を大きくするさいには隘路がありました。たとえば、ロッテはチューインガムから事業を始めました。企業を大きくするには大型の融資が必要ですが、これに対応できる金融機関がない。やむをえず、帰化の道を選択したのです。

ところが、日清食品の安藤さんの場合は少しちがいました。私の高校時代、チキンラーメンがみるみるうちに大ヒットした頃、彼は新しく工場をつくるにあたって、台湾の国籍では設備資金の調達はできないの

で、日本の金融機関を利用するしかありませんでした。やむをえず日本国籍をとりました。台湾の人たちはとても団結力が強く、「彼は将来なにかをやるだろう」と仲間たちは彼を支えていたそうですが、安藤さんが日本国籍をとったと知り、裏切り行為だと怒って安藤さんは台湾社会から村八分にされたのです。先日、蓮舫さんが台湾籍を放棄したときに、台湾は少し騒ぎました。国籍を捨てることは、自分の国を捨てることです。台湾にはそういう厳しいしほりがあるのです。

経済成長がめぐりあわせを変えてくれた

われわれ在日の場合には、外国人登録の携帯義務等、いろいろな規制がありました。いっぽう、1988年のソウルオリンピックの少し前から、韓国の経済はものすごく力をつけていました。「アジアの四龍」と表現されて、韓国、香港、シンガポール、台湾の四か国・地域が、東アジアの経済を引っ張る原動力だともてはやされました。

金持ちがたくさん生まれ、お金がこんなに入ってどうしたらよいのかと困ってしまつて、使い道のわからない人が増えました。そういう人はなんでも買いたくなるのです。意識の面がついてこないから、たとえば5000円のを「いいものですよ」と紹介されたら、1万円でも黙って買ってくれるという話が、日常的に伝わっていました。

韓国では不動産価格が右肩上がりで上昇しました。それはあまりにも大きな変化でした。われわれの友人や中小企業の社長も不動産に投資しましたが、みな不動産業界に手を出せばかならず大きなお金儲けができました。これで豊かになった人たちが、私の周囲にはたくさんいます。

彼らとはいまもつきあいがあります。私は出来の悪い人間なので、いまもいろいろな失敗をしつづけています。しかし、めぐりあわせのなかで、ひたすら一所懸命に生きてきました。日本で生まれて、家族の犠牲もあって、ここまで私を育ててくれたことをありがたく思います。

私たちは時間の制限のなかで、限られた生き方しかできません。私の姉は、殆どが亡くなって、私がいちばん長く生きています。これはもう致し方のないことです。そういうなかで、限られた人生をどう生きるかが大事なのです。私はいまでも模索をつづけているつもりです。

新しい時代に在日の存在をつなぐ

そんななか、たまたま小倉先生と出会う機会がありました。あらためて、自分の立場をもういちど確認することは、国籍の問題や日本社会のなかでどう生きる道があるのかを考えるうえで大事だと思いました。在日の参政権の問題などいろいろなことが議論されていますが、私は肩ひじを張らないで、時代の流れのなかでそれなりの対応をしようと思っています。

移民として日本にきて、日本社会に定着している在日の人たちとそれに対する日本社会は、ヨーロッパの移民の歴史とくらべれば、私はそれほど深刻な問題ではないという意識をもっています。私がつきあっている人びとにあまり問題がないのかも知れません。

韓国併合から100年以上がたちます。在日100年の歴史をみて、当初在日の人はどうして日本にきてこんなに苦勞しなければならなかったのかと考えて悟ったのは、教育が必要だということでした。子どもたちに教育を与えようと、在日の人には死にもの狂いで取り組んだと思います。周りからバカにされず、差別を受けたい方法を探したいという意識で、石にかじりついてがんばった人はたくさんいたと思います。

私は、そもそも差別の構造とはなにかと考えます。先住者がその土地にいて、異物がきたときに反応するのが人間の世界です。こういうとき、先住者は「この人たちは、自分たちの既得権を侵しにきたんじゃないか」と疑います。たとえば、大阪の人が地方に行くと、「大阪の人はずる賢い。ここでもなにか言うと、身ぐるみをはがれるのではないか」と警戒感をもたれます。しばらく話すうちに、「そうか、そうでもないかなあ」となりますが、じつさいにそう思われた人もいるのでしょう。日本の田舎では、「〇〇地方の商人はタチが悪いから気をつけろ」と、しょっちゅう耳にします。互いに気を許して理解しあえるまでには、ずいぶんと時間がかかるのだと思います。

「こうしたい。こういうかたちで進めたい」と考える人達がグループをつくって運動を始めると、かならずそれに反発する勢力が出てくると思います。あえてそういう権利闘争のようなことをするのが正しいのでしょうか？ 韓国併合から100年をへて、在日の人たちは教育の面では遜色ないレベルまで充分に育ってい

ます。これは断言してもよいと思います。

私たちは、1939年の創氏改名で「通名を使え」と勧められました。もともと、韓国の戸籍には「本貫」というものがあります。同じ李さんでもどこの李さんなのかという、ルーツを示すものです。私の名前である「洪」にもルーツが複数あって、先祖が中国のこういうところの出身だということ、多くの洪は先祖の地である「徳山」という通名をつけました。これは韓国の人ならば、すぐにわかります。「どこの徳山ですか？」と聞かれて「私は○○です」と……。 「あ、同じ洪氏ですね」

族譜には「年代に応じ、名前のなかにこの決められた漢字を使え」という約束があります。私の名前を見て、10歳くらい年上の人が私に「お兄さん」と言ってくる場合があります。何代目ならば「○○○○」、かならず規則にそった漢字をつけますから、家系の流れもわかります。

さて、故郷に錦を飾ろうと考えていた一世の時代はもう終わります。私たちの時代もほぼ終わり四世、五世の時代に入って、在日の人たちが日本社会のなかで充分に通用する状況になっていると思います。

次世代の在日の住む場所は日本であり、韓国ではことば、文化の違いで生活の場を確保することはむずかしいと思います。

力を合わせて共生をめざす

1980年代の後半から韓国の国力が増し、私たちが在日は日本人と同等の福祉を得られるようになりました。年金における救済措置や健康保険でも、やっと日本人同等の待遇を得ることができました。これは韓国人がブッシュしたのではなくて、日本が自主的に法律を変えたといういきさつがあると思います。これには韓国が国力をつけたことが影響したと、私は考えています。

いま本国がいろいろな問題で混乱に陥っていることは、在日にとつてはたいへん困ったことだと痛切に感じます。とくに慰安婦の問題は、とても頑強につづいています。私は、日本にいる韓国の駐在員たちと話す機会があり聞いてみると、多くは「被害者意識」の克服が問題と話します。

いつまでこんなレベルでいるのか。日本に対する意図のないやがらせは、決して利益にならないでしょう。在日は、韓国のやり口をわずらわしく思っています。なぜ一つのトラウマから抜けきれずに、わけのわからない動きをするのか。むしろ、国の力を弱体化させるようなことをしているのではないか。しかし、彼ら自身が行くところまで行つて考えるしかないのです。国力が弱くなろうとどうなろうと、彼ら自身を考えなければならぬ問題だと思っています。

われわれ在日が、はたして韓国になにか影響力を行使できるのかというと、おそらくむずかしいのではないかと思います。日本社会そのものが、まだ完全に国際化していません。日本はこれまで外圧によって国を変革してきたと思いますが、国民が今後の生き方や将来を自分の力で考えるようになり、もう少し柔

軟な対応ができることを期待するしかありません。

たとえば、一方的に「参政権をよこせ」などと言うのではなくて、相手と共生して、互いに力を合わせるのがよいでしょう。在日かどうかというレベルではなくて、互いに力を合わせて「この国をなんとかよい国にしようじゃないか」と智恵を絞って取り組む時期ではないか。のちほどみなさんとディスカッションするときに、どういう方法が望ましいのかなどを議論できればと思います。ありがとうございました。

司会 ● まだまだお話を聞きたいところですが、10分間の休憩をはさみ、ワークショップの準備に移ります。ワークショップは15時20分から始めさせていただきます。さきほど話題になりましたように、小倉先生に歴史などについての参考資料をご用意いただいておりますので、ワークショップまでのあいだにお目通しください。よろしく願います。(丁)

*コーチシナ フランス統治時代のベトナム南部の呼称。

連続フォーラム「チョゴリときもの」No.24

今を生きる在日コリアン
オールドカマーとニューカマー 第2回

ワークショップ「共に生きる、ということ」

第2部 ワークショップ

日時	●	2017年3月10日(金)
場所	●	k o k o k a 京都市国際交流会館
進行	●	小倉紀蔵氏 京都大学大学院人間・環境学専攻教授
講師	●	洪淳道(ホン・スンド)氏 FTS総研代表

※所属や役職等は、フォーラム開催時のものです。



グループディスカッションの概要

洪氏による講演を受け、四つのテーマ別のグループに分かれて意見交換を行なった。

グループ分けは、参加者の関心のあるテーマをあらかじめうかがったうえで分かれていただき、一つのグループごとに小倉氏の研究室の学生がファシリテーターとなって進められた。

1グループ約8名で、性別や年齢はさまざまであった。

ディスカッションを行なったテーマと、各グループから出た意見は下記のような内容であった。

またディスカッションの後には、グループごとに話しあった内容をおのおの発表し、全体で共有、講師からコメントをいただいた。

テーマ

- ①国籍・参政権（パブリックな問題）
- ②名前・ことば・教育・結婚（プライベートな問題）
- ③差別・排外主義（日本社会との問題）
- ④オールドカマー・ニューカマー（新しい人たちとの問題）

各グループから出た意見(抄)

在日の人口は全体的に減る傾向にある	韓国では夫婦同姓にしない理由は
国籍を変える理由について	両国の女性の社会進出について
在日の権利と義務	在日コリアンへの差別、ヘイトスピーチについて
参政権や生活保障について	本名のカミングアウトに対する周囲の人の反応
ハンゲルの名前にも意味があるのか	通称名を使うジレンマ など

小倉 ● 四つのグループの発表が終わりましたが、10分くらい延長します。洪先生、それぞれの発表についてコメントいただけますか。

洪 ● テーマにある「名前、本名」について、私の子どもの経験をお話してみたいと思います。

日本社会のなかでは、本名を名乗っても通用します。たとえば、企業が就職希望者を受けつける場合です。すでに、名前にこだわらず能力があれば積極的に採用しようという意識になっています。1980年代の後半くらいから、私にはこういう意識がありました。私自身、それまではずっと通名を使っていたのですが、世の中をみながら、「もう本名を使ってもよいかな」と思っていました。私の子どもも通名を使っていたのですが、大学に入るときに本名に変えました。これから伴侶を得て日本社会で生きるには、思いきって本名を名乗らないと、その子どもにとって問題になるからです。

娘の友だちが、「いったいどういうことなの。あなたはなんでこんな名前なの」と言ったそうです。「じつは韓国人なの」と答えると、「韓国人だから、なに？」と友だちは言う。在日の存在を知らない世代の人たちがいて、とくに教える必要もないのですね。こうして自分たちで覚えてゆくのです。娘は友だちから「韓国籍だと、なんで問題になるの」と言われたようです。

言い方を変えれば、日本社会がそれだけ成熟してきたと理解できるのではないかと思います。日本社会が国際化するなかで、人間のつきあいなんて互いにウインウインの関係がなければ成り立ちません。ビジネスと同じです。社会の役に立つのであれば、その人が受け入れられる可能性は高くなると思います。

在日も変わる必要がある

「在日は日本社会のお荷物だ」と言われた時期が、長いあいだつづきました。所得が低くて生活保護を受ける人が多く、貧困に耐えきれなくて北朝鮮に帰った人たちもたくさんいます。近年のヘイトスピーチのターゲットは、日本社会で福祉にタダ乗りしているといわれる特別永住権のある人で、憎しみの対象になっています。しかし、在日自身もレベルアップしなければなりません。貧困層は、どこの国に行ってもたくさんいるのです。

在日が日本社会で活躍して、それなりに納税の義務を果たして国の財政に寄与していることを考えれば、一面的に「特別永住権をもっている人たちは荷物だ」と訴えるのは、品位に欠けるのではないかという気がします。いちばんよいのは、日本社会の国際化に共に力を合わせ、日本で共に生きるという意識を少しずつ成熟させてゆくことです。

むしろこちらからプッシュして、国際化を時間的に短縮する方法もあるのですが、どちらがよいのか、私も結論は出せません。力で進めるとかならず反作用が出ますから、一方的な方法でないほうがよいでしょう。私の立場からみれば、もっと在日ががんばって、日本人に認められて、必要とされるような状況がくれば理想的です。それには少し時間がかかるような気がします。でも、確実に日本社会のなかに溶けこんで（重層化）しています。

オールドカマーは充分に溶けこんでいる

小倉 ● ほかのことに関するコメントはよろしいですか。まず私から、事実関係についてお答えしなければならぬことがあります。これにお答えして、洪先生にもういちどマイクを渡したいと思います。

グループの発表で出たように、在日の人口が減っているのはたしかです。これはいわゆる帰化によるものですが、「帰化」ということが嫌いな方もいらっしゃいますので、「日本国籍を取得する」というニュートラルなことを使ったほうがよいと思います。日本国籍を取得する人たちが多くいることはたしかです。しかし事実として、日本国籍を取得する人たちがいけば多かったのは1990年代です。1年間に1万人くらいの方が取得していました。近年は年間4千人から5千人で、日本国籍を取得する人の数は減っています。

なぜかという、在日のなかで若年層が少なくなり、高齢化しているからです。70、80歳台の人が日本国籍を取得するよりも、やはり30、40歳代くらいの方が取得するほうが多いのです。日本社会でこれからどうやって生きてゆこうかと真剣に考え、日本国籍を取得しようとする人たちは多いです。もちろん自然減もありますが、在日のなかではおもに30、40歳代の人たちが日本国籍をとって減っているのです。

いっぽうで、オールドカマー全体では人口の自然減が起こっています。つまり、生まれてくる人よりも亡くなる人のほうが多く、少子化しているのです。日本社会と同一ような現象が起こっている。一般的にマイノリティは子どもをたくさん産むといわれますが、在日コリアンはこの意味ではマイノリティではありません。

ません。日本社会とほとんど同じになっています。

それから、権利と義務の問題です。これはむずかしい問題で、さきほど洪さんは「在日が日本社会でもつと認められる存在になるべきだ」とおっしゃいました。私もそう思います。しかし、べつの言い方をすれば、多くの在日の方はこの社会で70年から80年くらい生きているので、充分に日本人と同じです。在特会（在日特権を許さない市民の会）の人たちは、「在日」というカテゴリーの人たちだけが「社会福祉に対する重荷だ」と言っています、そうではありません。つまり、在日にも貧乏な人もお金持ちの人もいて、日本人と同質的な存在になっています。

日本人とちがうところは、在日の人たちは高学歴者の比率が高い点です。日本人が医師になる比率より、在日の人が医師になる比率のほうが圧倒的に高い。むかしは就職における差別がありましたので、医師になることは社会のなかでしかるべき立場を獲得する道でした。1977年まで、在日の人は弁護士になることもできませんでした。金敬得さんキムキョクドクが初めて日本の司法修習生になる道を拓きました。これ以降は、韓国籍でも司法修習生になれるようになりました。裁判官にはなれませんが、弁護士にはなれます。在日の人たちの弁護士比率は高いです。

こういう意味で言えば、在日の人たちは、特別なマイノリティとして日本社会にいる存在というよりは、むしろ日本社会のなかでかなり成功している人たちが多くいるグループだと私は思っています。とくに、オールドカマーの人たちには成功している人が多いです。

名前にこめられたイメージ

次に、「名前に意味はない」という意見です。ハングルで書かれた名前には充てるべき漢字があります。たとえば「キム・ジョンウン」の「ジョン」に充てる漢字はいくつかあります。ハングルだけだと、「正」なのか「貞」なのか「定」なのかはわからないから、はつきりと意味はわかりませんが、その裏側には一対一対応で漢字がありますので、意味がないとは言えないと思います。

どういう漢字を充てるのかは、なんとなくわかります。たとえば「ジョンスク」という名前ならば、「貞淑な人か、静粛な人かな」と思います。漢字ほどではないけれど、なんとなく意味が伝わってくる。「ジョンスク」という名前からは、鋼鉄のように強い男というイメージはまったく湧いてきません。

次に、夫婦別姓の問題がとりあげられました。日本社会で在日の人がルーツそのままの姓と名前で暮らすのは、もちろんよいと思います。しかし、それも人それぞれで、在日のなかでも通名、つまり日本人風の名前がよいという人もいます。日本社会で抑圧されているからではなくて、ほかの理由で通名のほうがよいという人もいます。

私の妻は在日韓国人で、もともと「全」という姓ですが、結婚して「小倉」にしました。私はそれがいやだったから、「なんでそんなことをするの。あなたは全でしょ、私は全という人と結婚したんだから」と言ったのですが、妻は「あなたと同じ名字になりたいの」と言うのです。(笑)それは嘘です。そうではなく、「子どもたちがう名字はいやだ」と言うのです。「私の子どもなのに、なんで私とちがう名字なのか」と。私の子どもは「小



倉」を名乗っています。こういう個人的なことは、いくら妻であつても私が抑えることはできないのです。

視点を变えて、在日外国人のゆくすえを考える

洪先生、最後に1分くらいでまとめをお願いします。

洪 ● 長い時間、ありがとうございます。人間の社会はつねにダイナミズムをもつて動いています。いまは韓国の人にはかりに目がいつていますが、これからは中国の方たちが日本に定着するでしょう。在日の歴史のくり返しがかならず起こると思います。東京に住んでいる私の友人が週末にやってきて「いま深夜のコンビニ店員は、中国人ばかりだよ。どうしてか知ってるか」と言いました。日本のパートの時間給は最低で900円ほどですが、中国の人たちはコンビニで「1時間600円で仕事させてください」と言うのだそうです。「600円で生活できるのか」と聞いても、「いいから600円で働かせてほしい」と言う。こうしてコンビニは中国人に職場を売ってし

まった。京都や大阪には中国の方たちがたくさんいらつしやいます。在日が経験してきた苦勞を、いまは中国の人たちがとって代わって、日本の社会で猛烈に働いています。

注意してみると、日本社会の底辺が動いています。こういう視点でものをみると、今後日本が別の世界に進む道がみえてきます。日本は在日外国人の労働力を必要としているのです。むかし、韓国から日本にきて肉體労働をした人たちと似たような状況なのです。

こういう視点でものをみて、私たちがいろいろなことを考える場を、今後もつづけられればよいのではないかと思います。ありがとうございました。

小倉 ● ありがとうございます。ディスカッションの時間が充分にとれず、消化不良のような感じになって申しわけありません。次回、もしこういうかたちで開催する場合は、もう少しディスカッションの時間をとりたいと思います。

司会 ● みなさま、本日はご参加いただき、まことにありがとうございます。お話を聞いて、みなさまで話しかつて疑問点などを出していただいたなかで、少しでも心に残ることが多くあればさいわいです。また、これまでの講演録冊子をご用意しております。第22回以降は冊子になつておりませんで、当協会のホームページに出ております。各自で印刷していただけたらさいわいです。ご用意しておりますものはご自由にお持ち帰りいただけます。最後に、アンケートのご協力をお願いいたします。本日の配布資料のなかにアンケート用紙が入っておりますので、回収箱にお入れください。本日はありがとうございました。(了)

お互いの「多様性」への気づき

最近、「ダイバーシティ＝diversity」という言葉をしばしば耳にします。新聞や雑誌記事でも、よく見かけます。「多様性」と訳されますが、ふと思うのは「多様性」という言葉は、以前から日本語として定着していた筈ではなかったか、ということです。いわゆるカタカナ語、すなわち外来語（主に英語）の音をそのままカタカナで表記する手法は、その言葉の適当な日本語訳がない、あるいはあっても一般に認知されていない新しい概念を日本語の文脈の中で表すときに用いられると解釈してよいでしょう。「多様性」というれっきとした日本語がありながら、まるで新奇な概念であるかのように扱い、振りかざす。私見ではありますが、既存の日本人社会が、実態として多様であるにもかかわらず、その集団的無意識において「多様であること、多様になること」への不安感をはらんでおり、それを「遠ざけてしまっている」結果、無意識のうちに「ダイバーシティ」なるカタカナ語にまつりあげてしまっているのではないか、という考えは穿ち過ぎでしょうか？

本連続フォーラムNo.24の収録を最後までお読みいただきありがとうございます。第1回目の大阪市立大学教授の朴一さんには「ニューカマー」と「オールドカマー」の間に横たわる生々しい感情をはじめ、あえてお聞きしないとわからない赤裸々なお話を伺うことができました。第2回目には、FTS総研代表の洪淳道さんにご自身の半生と、国としての韓国、日本、そして「在日」という存在について、そのご経験に基づく俯瞰的な視点からの率直な思いを語っていただくとともに、来場者の方々にご参加願うワークショップ

（ディスカッション）をはじめて行いました。本フォーラムの提示するテーマが「自分たちの社会のこと」と感じていただけたなら幸いです。また、テーマと提示される個々の課題を整理し、専門家の視点からの解説を交えながらわかり易く進行してくださった小倉先生、本当にありがとうございました。

日本語の言語空間において「在日」という「枕詞」でくくられることで、しばしばその属性を十把ひとからげに捉えてしまいがちですが、今回のフォーラムを通して改めてその「多様性」に気付かされました。「チヨゴリときもの」という二項対立めいたタイトルのフォーラムではありますが、既存の日本社会の内部が実態として多様であるのと同様に、「在日」の在りようも多様なら、「多様性」という言葉が接点となり、いつの日かそれぞれの「我々」から、全体を包摂する大きな「我々」となれることを願い、結びしたいと思います。

公益財団法人京都市国際交流協会 事業課

岡本昌也

ともに寄り添いより良い未来へ

連続フォーラム「チョゴリときもの」は今回で24回目を迎え、これまで在日一世、二世、三世の方から実体験とともに生の声をお聞きしてまいりました。そこで今回は初めて参加者同士で疑問や意見を出し合うディスカッションの時間を設け、幅広い年代の方にご参加いただけました。

いまだに存在する差別や偏見は相手を知らないからこそイメージによるものが多くあると感じます。相手を知り文化背景を知り、ともに考えることでより生活しやすい社会に繋がるきっかけとなれば幸いです。また生きることの難しさを感じながらもご自身を貫いてこられた朴一さんと洪淳道さんのお話から力強さを感じられました。

朴一さんのことばに「ニューカマーにとってオールドカマーは未来予想図になりうる」とありましたが、双方の歴史と現在について理解を深める機会となりました。お話くださったお二方、進行役の小倉紀蔵先生に改めて感謝申し上げます。

公益財団法人京都市国際交流協会 事業課

山本弥生

